明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

明治四十年四月二十日發行（毎月二回二十日發行）

April 20th 1908.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 192.

大日本蠶絲會報

第百九拾貳號要目

▲口繪▼

●膿病の病原體に就きて　農學博士　大森順造
●蠶兒の斑紋に就て　農學士　石渡繁胤
●軟化病結論　愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎
●夏秋蠶種の催青　山形縣技師　河西大彌
●夏秋蠶に就て　東京蠶業講習所技手　横田長太郎
●鳥取島根兩縣下の製絲業　德田實也
●製絲業家と輸出業者との直接取引　三井物産會社横濱支店長　北村七郎
●日本に多き病　醫學士　茂木藏之助
●青菜料理　大日本製茶學會長　石井泰次郎
●桑樹害蟲驅除法　農學士　明石弘

▲讀者文藝▼

▲製絲改良の先覺者　速水堅曹君▼

TOKYO.
The Association;
No. 2 Mitoshirocho, Sanchome, Kanda, Japan.

賜天覽

特許中原式生繭乾燥器

○本器は生繭乾燥の大王と稱せらる

○本器は繭を乘せたる棚枠と旋風器と相待て回轉し外氣を送入しつゝ濕氣を充分排除する爲め溫度低き割合に乾燥時間早く（生繭より全乾燥繭入籠の差替なく六時間内外）既設諸君の證明せらるゝ處なり

○本器の特長は乾燥室内に大なる旋風器ありて溫度を平均すると共に繭を乘せたる棚枠の回轉と乾繭は生繭同等の色澤に出來得る事

一壹回に壹石五斗入　火熱式　金具代金七拾五圓也
一壹回に參　石　入　同　金具代金百參拾五圓也
一壹回に六　石　入　同　金具代金四百五拾圓也
一壹回に拾　貳　石入　蒸汽式上部　金具代金五百參拾圓也

右外本器壹回に貳百四拾石入蒸汽式の實地試驗の出來居るは京都府下郡是製絲株式會社に据付あり

○本器据付に付經費の小額なる事驚の外なし

説明書圖面は御請求次第送呈す

東京市本所區御右衛門町三十四番地

特許中原式乾燥器製作販賣所

電話浪花貳貳貳六番（電略ナカ）

故京都蠶業講習所長松永伍作君
Feu Monsieur G. Matsunaga, Directeur de la Station sericicole de Kyoto

第百九十二號　大日本蠶絲會報

目次

論叢……一—九
○膿病の病原體に就きて　農學博士　大森順造
○蠶兒の斑紋に就て　農學士　石渡繁胤
○軟化病結論　愛媛縣農業試驗場　池田榮太郎
○夏秋蠶種の催青　山形縣技師　河西大彌

演壇……一〇—一二
○夏秋蠶に就て　東京蠶業講習所技手　横田長太郎

拾芳……一二—一六
○鳥取島根兩縣下の製絲業　生絲檢査所技手　德田實也

叩門……一六—一七
○製絲業者と繭出業者との直接取引　三井物産會社横濱支店長　北村七郎

家庭……一八—二三
○日本に多き病　農學士　茂木藏之助
○青菜料理　大日本割烹學會長　石井泰次郎

講筵……二三—二七
○害蟲驅除法　農學士　明石弘

心影……二七—二九
○製絲改良の先驅者速水堅曹君

遠響……三〇—三一
○英國に於ける絹織物製造及原料（蠶絲）購入の狀況

問答……三一—三四
○桑樹心止りに就ての質問幷答○魯桑中刈仕立に就き質問幷答○蠶種取扱及其他に就き質問幷答○横繭殺に蠶蛹に就き質問幷答○木挽屑利用法に就き質問幷答

資料……三五—三六
○千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計

讀林……三六—三七
○古屋氏の蠶兒稚飼法を讀む　平岡政三

絲況……三七—四一
○横濱市○里昂市場○紐育市場○上海市場○廣東市場

時報……四二—六〇
●會報錄導＝支會員の嘱託＝地方委員部職員の嘱託＝特別會員の推薦＝功績調査委員＝桑園調査報告取扱に關する調査委員會＝青島理事の出張＝評馬支會蠶業講習會＝宮城支會蠶業四周＝高等蠶業講習會＝生絲定期取引に關する調査委員會＝柴支會玉繭製造其他講習會＝富山支會總集會＝島根支會品評會＝茨城支會發式の狀況
●蠶桑雜報＝全國收繭高＝蠶種製造獎勵規程＝總督府の天蠶調査＝南滿移蠶と落蛹＝落蛹の增加＝於菟絲一部實止＝四多摩郡の發蛾桑園＝生絲檢査所月報＝四十年日本國産繭別生產額幾文＝十年間生絲平均相場（幾文）
●讀者實驗＝蠶飼法＝寄附書目＝新刊紹介＝人事變報＝受領錄

故松永伍作氏の略歴

全一生を擧げて我蠶業界の爲に貢献せられたる氏の略歴を敍せんに、氏は嘉永六年五月二十八日を以て福井縣今立郡片上村に生れ、幼より蠶桑の業を好み、黽勉斯學の研究に從ひられたるが、抑も氏の官に使へられたるは明治九年六月内務省勸業寮の屬となられたるを以て始めとす。其年十一月同寮試驗場製絲掛に任じ、十二年五月宮内省屬を命ぜられ植物御苑掛に轉ず、十七年四月農務局樹藝課勸務となり、十八年四月繭絲織物商漆器共進會審査部兼務を命ぜられ、八月農商務省御用掛となり農務局勸務申付けらる。十九年五月農商務屬に任じ判任官八等に敍し、十二月同局樹藝課兼務申付けられ、二十年五月農商務八等技手に進む。二十二年七月又進みて七等技手となり翌月第三回内國勸業博覽會出品投委員を命ぜられ、十月西ヶ原蠶業試驗場物品取扱主任を兼ね、二十八年三月第四回内國勸業博覽會審査官仰付けられ、二十九年四月蠶業講習所技師に任ぜられ高等官七等に敍せらる、翌月從七位に進み二十年四月清國へ差遣せられ、三十一年四月高等官六等に敍し正七位に敍せらる。三十二年六月京都蠶業講習所長を命ぜられ、翌年五月高等官五等に進み從六位に敍せらる、三十五年高等官四等に陞敍し正六位に敍せらる。三十六年一月蠶種改良調査委員を命ぜられ同月又第五回内國勸業博覽會審査官を仰付けらる。同年六月勳六等に敍し瑞寶章を賜り高等官三等に敍し從五位に敍せらる、四十一年四月病氣危篤に付特に位一級を進められ正五位に陞敍せらる。嗚呼氏が官海に於ける略歴如此にして而して我蠶業界に盡されたるの功績や枚擧に遑あらずと雖も、蠶病試驗場在勤中蠶種製法を定め之れが勸奬に力を盡されたるが如き、又清國より蠶種を携帶して歸朝し本邦蠶種改良の資に供されたるが如き、又本會學藝委員として終始其發展に努められたるが如き、又京都蠶業講習所の設置に就きて大に畫策盡瘁し、今回同所に女子蠶業教育の途を開始せられたるが如き、就中各種の養蠶法を比較研究して之を統一せられたるが如きは特筆すべきものにして、東西蠶業講習所に於て親しく氏の薫陶を受けたる者約三千名の多きに達し、二十有餘年の間全國各地に出張して養蠶講話を試みられたる其回數の如き幾何なるを知らざるなり、實に氏は我蠶業界に於ける大先覺者にして大恩人なり、而して天此大先覺者此大恩人に藉すに響を以てせず、享年五十有六歳にして溘焉として本月一日午前十一時十分に遠逝せらる、嗚呼悲い哉嗚呼悼い哉。

圖版第一附說（圖は上方前部にして後方下部なり圖解の左右は總て其者に向てなり）

(1)(2)無疣疥蠶の疣紋型(左(5)(4)僅に疣紋を顯せるもの(3)は左4は右)第三環節の疣紋(6)第五環節の疣紋(左)標準形(7)(8)(9)(10)(11)第五環節疣紋の變形(7)及10は左8 9 11は右)(12)第八環節の疣紋(右)標準形(13)(14)(15)第八環節の疣紋の變形(右)(16)第二環節の疣紋左(17)茶疣紋蠶の第二環節の疣紋(右(18)同第三環節の疣紋(19)同第五環節の疣紋(20)同七八環節の疣紋(21)黑疣紋蠶(22)茶疣紋蠶(23)結蠶。

大日本蠶絲會報　第百九拾貳號

論叢

膿病の病原體に就きて

學士會員
農學博士　大森順造

從來膿病の原因に就きて論ずる所洋の東西を問はず、千差萬別歸着する所なく、養蠶家は專ら飼育法の適否に歸せる者多く、近年迄其に之れが科學的研究に從事する者なかりしによる、其發病の因として、唱へ來りたる者は蠶室内の空氣の不潔、體溫、溫度の激變、蒸熱、冷濕、溫氣、多きこと、低溫にして濕氣多きこと、即ち密飼、蠶兒呼吸作用の障碍等にして此等の事項たる單獨因にして一般蠶體の生理衛生作用を害し膿病のみに限らず、其他の蠶病を誘發する者たること論を俟たず、之れ飼育法の不良なるを以て專ら膿病を誘發する者に非らざるを知るべし、然らば他に其に膿病を惹起すに足るべき病原體の存在せざる可からざる識者を頻たざるなり、之れ眞に科學的方面よりして病原探究をなすの必要ある所以なりとす、先づ之れが病原探究をなすに方り決定すべき問題は本病は傳染なるや否やにあり而して本病の傳染性を有することは數多の接種試驗を行ひたるに自から其問題を解決するに難からざるべし、故に余は明治三十年五月より今日に至る迄接種試驗を繼續して毎に其傳染性たるの確證を得たり、又東西蠶業講習所並に福島縣蠶業學校の試驗成蹟に依つて明らかなりとす、故に今此所に之れを上一般の通論となす。

膿病の傳染病なることは世上一般の認めず傳染する徑路は皮膚の負傷部よりするとの二法あり、然れども其發病するに至る病毒の消食管よりするとの二法あり、然れども其發病するに至る時間の長短ありて、前者に於て速かにして後者にありては比較的遲しとなす、又新鮮なる膿液を接植したる者と數年迄乾固したる者を接植するとは其毒力を減殺するの數に差ある者にして年月を經るに從ひ其傳染力を有する者とせば、膿液中には如何なる病原體を含むや否やを探究するは本問題を決定するに方り、最も重要なる事なりとなす、其病原體は果してボルレー氏の唱ふるが如く、膿汁中に多數浮游する多角形體なるか又クラルスチック氏の唱ふるが如き細菌なるか、將た又他に病原體を存するかを決定せざる可からざるなり、故に余は先づ第一に細菌の見地よりして研究を始めたり、即ち膿

液中に存在する傳染原の顯微鏡的檢査をなしたるに、常に球狀圓體に類似するが如き球體の存在を認むれども、これ其の原體に非らずして、次に又病原體の組織に就き明せんとするに、組織學的探究に從事したるに一つも細圓體の寄生より起る者たることを證明すべき物あるを發見することを能はず、返つて他の事實を發見するの便を得たり、若し本病が組織の細胞の寄生より生ずるとせば、其の細胞の組織に大變化を來たし、之れを壞崩せしむるに至るべき巨多の細圓體を存せざるべからざるなり彼の人體を化して膿性疑を容るべき者なし、然るに膿病の組織的發病研究は全く消極的の結果を現はし、一つも之れが爲めに細圓體を取り、之れが膿質培養基に於て屬平培養を試みたり、而して試驗の誤謬を避けんが爲めに充分注意して膿液を採取すべき蠶體の外面に存在する細圓の混入することを避けたり、然るに其の結果或時は扁平板上に一つの聚落を得たることとありたるも純粹培養をなし、各皮下接種試驗を行ひたり、然れども一つも常に積極的の成蹟を呈する者なく、細圓たりと雖も常に膿液の聚落を得たること能はざるなり、又其の一定したる聚落を得たる者は決して一定したる數多の聚落を得ることなく、確かに膿液のみにては不充分なりとなし、病原體の外面を消毒し、之れを消毒せる器中に磨碎し、其の體液より屬平培養を行ひたるも、前に一定して不變の知く、細圓學的檢査を遂げたる膿液の接種試驗を行ひたるに、毎常積極的結果を示し、而して又前述の如く毎

圖）而して之を回りて無毛の部あり、又僅かに斑紋をあたしたるが如きものは、其毛の部にして毛の位置に沿ふて其下部に濃淡色をなせるなり、（第3、4圖）第二環節に於て同じ淡黒色を呈せるなり、又第三環節に於て黒色の小斑紋を明にして淡黒色をなせるなり、第四環節に於て其中心は透明にして淡黒色をなせるなり、第五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第九十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百五十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百六十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百七十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百八十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第百九十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百五十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百六十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百七十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百八十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第二百九十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百五十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百六十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百七十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百八十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第三百九十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第四百四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第五百五十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第六百四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百二十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百三十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第七百四十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十四環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十五環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十六環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十七環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十八環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百十九環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百二十環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百二十一環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百二十二環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百二十三環節に於て其周圍は黒色をなせるなり、第八百二十四環節に於て其周圍は黒色をな

ふべし。

又蠶病中にも高等動物の疾病の如く地方病なるものあるを以て廣く各地に於て研究を重ねるも到底蠶病の一般を明かなる能はざるや明かなり、況んや軟化病原菌を一二種に決定する如きは病理學上少価値も有せざるや痴者も尚ほ一笑に附し去らんのみ。

故に病菌に化人菌と認すべきもの今後研究を進むるに從ひ尚ほ多数の発見あるべきは疑なし。

病菌上空胞病、小病下病吐泻病の四種中何れかに編入し得べきものなるべし。

又細菌にして軟化病原体より分離したる當時は病原性を有するも培養を重ぬるに從ひて毒性を減ぜるものなるを以て培養に依りて毒性を減じたりとて非病原菌と爲す能はざるなり何んとなれば此細菌を再び蠶体を通過せしむれば又毒性を生じ得るのみならず自然に於て培養基を繰返するが如き場合是なければ生物は其體強健なれば或程度までは病原菌に抵抗する免疫性を有するものなるを以て少量なる病原菌の侵入性を以て除去し健全體に傳染病を少きものなり之に反して虚弱なるときは或は非病原菌の侵入に依りて斃るる場合もなきにあらず、此等は既に生理的疾病に陥りつゝあるを以て其細菌の繁殖に依り一層生理作用を妨げ病勢を進め斃死するものなり、蠶に於ても亦然りとす、去れば軟化病の第一豫防法は蠶體を健全に發育せしむるにありとす。

し。(完)

附記

本論に筆を執りて既に二年に亘り貴重なる誌上を汚たる益論及したきもの一にして足らずと雖も今回は之を以て擱筆し再び筆を改めて軟化病に就て讀者に見ゆるの日あらん論中拙見に對し異見を存するの士は遠慮なく批評せられたし。

(二月二十九日記稿)

夏秋蠶種の催青

特別會員
山形縣技師　河西大彌

成繭の優劣と催青

成繭の優劣なるもの其價格高く否らざるものは其價の低きは言ふ迄もなくなりと雖も、其因て起る事由何處にあるか、同一品種の風穴種にして貯藏及出穴の同時なるにも拘はらず、又生産種の同一品種にして同時の蟻蛾及飼育場所の異なるに依り、成繭に優劣を來すことあるは何故か、學者は之を陽氣の爲ととなし、或は之を陰氣に歸し、或て其他は顧みざるものの如しと雖も、若くは飼育及製種家は之を陽氣の爲ととなし、或は之を陰氣に歸し、或て其他は顧みざるものの如しと雖も、若くは飼育及品質如何に因て其原因蠶種にあるか、又陽氣の關係か、果して其原因蠶種にあるか、又陽氣の關係か、桑葉の關係か、餌葉の關係か、成繭の優劣に何等の關係なしと云ふにあらず、固より蠶種の良否及飼育の巧拙桑葉の適否は蠶兒の生育に關係し、延いて其成繭の優劣に影響するは言ふ迄もなきことなりと雖ども、這は未なり枝葉なり、余が論ぜんとするものは如期枝葉にあらずして其根本なり、根本とは何ぞ即ち、未だ蠶兒とならざる其以前に於て、既に成繭の優劣を生ぜざる他に一大要件の存するあり、其成繭の良否を支配するものなるを、然らば一大要件とは何ぞ、即ち赤其理由を知悉せらるゝならん、然れども夏秋蠶に至つて其催青法を施すもの世間幾何かある、況んや其理由を知りてこれを實行するものに於てをや、去れば夏秋蠶界目下の狀態より茲に余が所見を發表するの無益ならざるを認め、左に夏秋蠶催青の方法及理由を述べんとす。

催青法とは何ぞや

蠶卵内の胚子は一定の温度に感觸すれば漸々發育し孵化するに至るものなり、一定の温度とは何ぞ、即ち催青期と云ひ、此期間の取扱を催青法と稱す、蓋し卵内の胚子が其包圍せらるゝ漿液膜を破り蟻蛾となり産下するに至れば、其卵殻を透して青色に見ゆるを以て

以て、製造用蠶は其目的良繭を得んとするに在るが故に、其の蠶種の催青期に於て、胚子をして最後越年すべき處念を變ぜしめざらんことに努めざるべからず、若しすして若し之れか催青法を等閑に附し、胚子をして不越年たる處念を發せしめんか、此生成する所繭は小形にして繭皮薄く絲質又不良なるを免れず、故に收繭量少なく且つ其價格の低廉なるを以て、養蠶經濟上多大の損害を來たすものなればなり。

温度の高低と胚子發達の遲速

蠶卵内胚子の發達は、生種に在りては產卵より、風穴種は出穴上、直ちに其發達を始め持續して休止することなき日にして發生し、六十八度内外なれば十五六日を要し、七十日を以て、五十八度なるときは三十日内外費し、六十度内外なるときは二十五六日を經過し、六十三度なるときは二十日を要し、七十二度なるときは十四日、七十一度なれば十三日、七十三度なれば十二日、七十五六度なれば十一日、七十八度以上なれば十日にして發生するに至るものなり、然れども其品種に在りても、其產時期を異にするものは、同品種にありても、其產時期を異にするものは、同一温度の時に於て同品種にありても、一日乃至二三日間の遲速を生ずるものなり、例之ば、一化性は二化性とより遲れ、又同一化性にあるものなれば春期の產卵は遲く、秋期の產卵は早く、又同一化性にして同時の產卵なるも其最初に產卵せられたるものは、最終に產卵せられたるものより遲れて發生するものなり、故に其品種名稱產卵期等に依り、催青期の温度の同一ならざるは勿論なり。

化性に變化を來す理由

元來一化性は一化にして越年し、二化性は二化にして越年す、其越年すべき準備は既に其蠶卵内胚子の發達すべき時代に於て已に之れが素地の生成せらるものなり、而して之を支配するものは實に温度なりとす、故に胚子の生成時代に於ける温度の高低は、蠶兒の本能を變じて二化となし、又二化を三化となすことを得るに至る、此間に於ける温度を適當ならしむる法を稱して防法と云へり。

斯の如く胚子は其の受くる所の温度の高低に依りて、其化期を變化するものにして、其催青期間の温度低くければ、幾回にても化性を持續し、又二化にて越年するものなり、前に述べしが如く越年すべきものは繭層良好なれども不良なるが故に、此期間に於ける温度の高低は、其繭質の良否を判定することを得べきものなり然れども催青期間中或る時期に於ての み其作用を發揮するものにして、其前後に於ける温度の高低は、何の等の影響をも有せざるなるかを知るは、催青上の要決にして實に緊點なりとす。

實驗に依れば胚子回轉して より、背面の羊膜全く癒着し胚子纖立する迄の温度の關係に因るものにして、即ち胚子の發達は其目的良繭を得んとするに在るが故に、其越年すべき處念を變ぜしめざらんことに努めざるべからず、若しすして若し之れか催青法を等閑に附し、胚子をして不越年たる處念を發せしめんか、其生成する所繭は小形にして繭皮薄く絲質又不良なるを免れず、故に收繭量少なく且つ其價格の低廉なるを以て、養蠶經濟上多大の損害を來たすものなればなり。

温度の高低と胚子發達の遲速

蠶卵内胚子の發達は、生種に在りては產卵より、風穴種は出穴上、直ちに其發達を始め持續して休止することなき日にして發生し、六十八度内外なれば十五六日を要し、七十日を以て、五十八度なるときは三十日内外費し、六十度内外なるときは二十五六日を經過し、六十三度なるときは二十日を要し、七十二度なるときは十四日、七十一度なれば十三日、七十三度なれば十二日、七十五六度なれば十一日、七十八度以上なれば十日にして發生するに至るものなり、然れども其品種に在りても、其產時期を異にするものは、同品種にありても、其產時期を異にするものは、同一温度の時に於て同品種にありても、一日乃至二三日間の遲速を生ずるものなり、例之ば、一化性は二化性とより遲れ、又同一化性にあるものなれば春期の產卵は遲く、秋期の產卵は早く、又同一化性にして同時の產卵なるも其最初に產卵せられたるものは、最終に產卵せられたるものより遲れて發生するものなり、故に其品種名稱產卵期等に依り、催青期の温度の同一ならざるは勿論なり。

化性に變化を來す理由

元來一化性は一化にして越年し、二化性は二化にして越年す、其越年すべき準備は既に其蠶卵内胚子の發達すべき時代に於て已に之れが素地の生成せらるものなり、而して之を支配するものは實に温度なりとす、故に胚子の生成時代に於ける温度の高低は、蠶兒の本能を變じて二化となし、又二化を三化となすことを得るに至る、此間に於ける温度を適當ならしむる法を稱して防法と云へり。

斯の如く胚子は其の受くる所の温度の高低に依りて、其化期を變化するものにして、其催青期間の温度低くければ、幾回にても化性を持續し、又二化にて越年するものなり、前に述べしが如く越年すべきものは繭層良好なれども不良なるが故に、此期間に於ける温度の高低は、其繭質の良否を判定することを得べきものなり然れども催青期間中或る時期に於ての み其作用を發揮するものにして、其前後に於ける温度の高低は、何の等の影響をも有せざるなるかを知るは、催青上の要決にして實に緊點なりとす。

實驗に依れば胚子回轉して より、背面の羊膜全く癒着し胚子纖立する迄の温度の關係に因るものにして、即ち胚子の

胚子をして過年種たらしむべき處念を發せしめざるべからず、若しすして若し之れか催青法を等閑に附し、胚子をして不越年たる處念を發せしめんか、其生成する所繭は小形にして繭皮薄く絲質又不良なるを免れず、故に收繭量少なく且つ其價格の低廉なるを以て、養蠶經濟上多大の損害を來たすものなればなり。

温度の高低と胚子發達の遲速

蠶卵内胚子の發達は、生種に在りては產卵より、風穴種は出穴上、直ちに其發達を始め持續して休止することなき日にして發生し、六十八度内外なれば十五六日を要し、七十日を以て、五十八度なるときは三十日内外費し、六十度内外なるときは二十五六日を經過し、六十三度なるときは二十日を要し、七十二度なるときは十四日、七十一度なれば十三日、七十三度なれば十二日、七十五六度なれば十一日、七十八度以上なれば十日にして發生するに至るものなり、然れども其品種に在りても、其產時期を異にするものは、同品種にありても、其產時期を異にするものは、同一温度の時に於て同品種にありても、一日乃至二三日間の遲速を生ずるものなり、例之ば、一化性は二化性とより遲れ、又同一化性にあるものなれば春期の產卵は遲く、秋期の產卵は早く、又同一化性にして同時の產卵なるも其最初に產卵せられたるものは、最終に產卵せられたるものより遲れて發生するものなり、故に其品種名稱產卵期等に依り、催青期の温度の同一ならざるは勿論なり。

化性に變化を來す理由

元來一化性は一化にして越年し、二化性は二化にして越年す、其越年すべき準備は既に其蠶卵内胚子の發達すべき時代に於て已に之れが素地の生成せらるものなり、而して之を支配するものは實に温度なりとす、故に胚子の生成時代に於ける温度の高低は、蠶兒の本能を變じて二化となし、又二化を三化となすことを得るに至る、此間に於ける温度を適當ならしむる法を稱して防法と云へり。

斯の如く胚子は其の受くる所の温度の高低に依りて、其化期を變化するものにして、其催青期間の温度低くければ、幾回にても化性を持續し、又二化にて越年するものなり、前に述べしが如く越年すべきものは繭層良好なれども不良なるが故に、此期間に於ける温度の高低は、其繭質の良否を判定することを得べきものなり然れども催青期間中或る時期に於ての み其作用を發揮するものにして、其前後に於ける温度の高低は、何の等の影響をも有せざるなるかを知るは、催青上の要決にして實に緊點なりとす。

實驗に依れば胚子回轉して より、背面の羊膜全く癒着し胚子纖立する迄の温度の關係に因るものにして、即ち胚子の

三、催青中の水洗及普通温度法を行ふべし。

秋蠶種の催青者は、如何に多くの秋蠶種の催青者なるも、蠶の飼育者は、毫も蠶の飼育者なるも、氣候の然らしむる所にして、人爲の及ぶ所にあらずと觀念し、單に飼育の關係上、催青法に大關係を有するを知らず、爲めに幾多の損害を蒙りたるなり。

殊に蠶種製造者なる越年種を製造せんとして、目的とする越年種を得ること能はず、爲めに勝からざる損害を蒙りつゝあるも、其變化性の理由を究むるものなく、從つて之れが豫防法を講ずるものなきは、實に遺憾に堪へざるなり。

斯は、畢竟、秋蠶業に關する知識の普及せざる結果に外ならずして、敢て怪びに足らずと雖も、當業者の是れより受くる損害の實大なるを觀るに忍びず、敢て當業者に警告するものに少なきのなれば、當業者たるものは其土地、其年其時期の温度に、注意することを最も肝要なりとす。

蠶種催青中の注意

一生種は風穴種とは別なり、催青中は温度の劇變を防ぎ、常に七十度以上の温度に接觸せしむることを要す。

二、風穴種にありて田次後念の變化を防ぐが爲めに、眠温法を施さんとする注意を忽べからず。

昇温すべき時は、蛻燥に過ぐるときは生育不揃となるの虞あるを以て、不越年種の水洗及普通温度法を行ふべし。

秋蠶種の催青は、如何に多くの秋蠶種の催青者なるも、蠶の飼育者は、毫も蠶の飼育者なるも、氣候の然らしむる所にして、人爲の及ぶ所にあらずと觀念し、單に飼育の關係上、催青法に大關係を有するを知らず、爲めに幾多の損害を蒙りたるなり。

殊に蠶種製造者なる越年種を製造せんとして、目的とする越年種を得ること能はず、爲めに勝からざる損害を蒙りつゝあるも、其變化性の理由を究むるものなく、從つて之れが豫防法を講ずるものなきは、實に遺憾に堪へざるなり。

斯は、畢竟、秋蠶業に關する知識の普及せざる結果に外ならずして、敢て怪びに足らずと雖も、當業者の是れより受くる損害の實大なるを觀るに忍びず、敢て當業者に警告するものに少なきのなれば、當業者たるものは其土地、其年其時期の温度に、注意することを最も肝要なりとす。

蠶種催青中の注意

一生種は風穴種とは別なり、催青中は温度の劇變を防ぎ、常

夏秋蠶に就て

編輯部出村郡三春町田村蠶友會の席上に於て講演せられたるものなれ間々經驗の浅く論の備はらざるなれども或は誤なきを保ずず願はくは氏及諸者に御寄する處なり

特別會員
東京蠶業講習所技手　横田長太郎

田村蠶友會の御頼みにより何か御話をせよといふ事ですから夏秋蠶に就て御話を致します。

近年各地に於る處で夏秋蠶が發達したので夏秋蠶の話をせよといふ事が度々あるが、私は是には滅に閉口するのであります、夏秋蠶に就ては私は常にこう考へて居る、外ではないが夏秋蠶の飼育法だと云ふて別にないと思ふ、若し諸君が全く夏秋蠶と別種のものと二つあると思ふのは間違てあるに春秋蠶は同一方法に飼ふかと問はれれば夫れは實際やる樣にして頂きたい、凡て事には同一方法であるから矛盾せん樣にして頂きたい、凡て事には同一方法で

一の仕事をするにあーする、こうすると云ふ考へでは仕事に間違が多い。何故に此仕事をするのであるかと云ふ事を考へる必要がある、若し其考へが無ければ人真似に過ぎぬ、夏秋蠶のみならず從來の養蠶家に於ては何故に云ふ事を考へる人は少ない、其一例を申せば養蠶家の曰く乾燥地に飼育せる人が濕地に行けば失敗をする事實がある、又甲地に於て豐作を得て居た者が乙地に於て失敗した例も少なくない、何故かといふと夏秋蠶と春蠶とは同じとすれば同じであろー夫れで何故にと云ふ事を深く考ふれば大丈夫である、今の甲地乙地云々は乾燥を知つて濕を知らぬとか、濕を知らぬとかつまり不具の飼育者に過ぎない、實利を揚げんとする養蠶家は乾も濕も知る必要がある、夏秋蠶飼育も此と同樣である、夏秋蠶と春蠶とは異ふかと言ひば夏秋蠶と春蠶とも性質とか習性とか發育の狀態とかに於ては異はんのです、已に異はないとすれば春夏の秋蠶に於ては異はない所がない、同一は凡てに於て同一である、然し實際に於ては春夏秋蠶の飼育法の同一でないのは即ち性は同一でも鵭りて發育するものでないから外界の境遇に左右される、即ち高溫の場合には發育も速かであるが低溫の場合には發育が緩漫であるから細溫の必要がある樣に場合によりて違ふ之のみでなく飼育法に於ては決して違はんのである、即ち外界によりて違ふ春蠶は寒地の飼育法と暖地の飼育法とは大ひに左樣にてはない、春蠶を飼育する時も夏秋蠶を飼育する時も其差引を知らぬと滿足なる結果を得られるものでない、寒必ずしも寒くないこともある、夏秋蠶の候とても涼しい事もある故に春

夏秋蠶の飼育法に差引といふ事を應用せんければならぬ、其年の氣候によりて豊凶の別るゝ飼育者となる譯けである故に飼育法には二つ無事を知て其場合により方法を異にする事を覺悟せんと困る事があるも、然らば蠶を飼ふには如何なる時に如何なる取扱をなすかといふに、其場合に適當する飼育をすれば宜しいのである、蠶と云ふものは如何なる方法にせば適當であるか又不適當なる時は何故に不適當であるかといふ事を知らんければならぬ、即ち飼育法には理論と云ふことがある、此理論を應用の手段と區別せんと好事を收むる事は出來ない、例之養蠶には適溫といふことがある、蠶には六十度より八十度九十度以上でも發育するが最も適當に發育する溫度を八十度とすれば此八十度が理論であつて各地に於ても變らないが其方法といふものは各地に於て差違で居る、即ち寒地に於ては補溫をするとか暖地に於ては涼しく飼ふといふ樣に其手段といふものは、全く反對であるが其目的は同一である、如何なるも適當であると言ふ事がわかれば自然に蠶に適當せる飼育法を施す事が出來る、されば土地が異つても蠶を生ずる靈ひがない故に夏秋蠶の飼育法に二つはないと考へて頂きたい、凡て事は別て考へるてなく何れの場合に於ても臨機應變と云ふ事を出來得る樣にせんければならぬ、飼育法に二種あるといふ事を考へて居るは大なる誤りである。

御免を蒙ります。

夏秋蠶にも春蠶にも最も大切なるものは給桑である、蠶兒を飼ふ方法と言ひば千差萬別で澤山あるが其基礎となるべきものは給桑である故に蠶兒を飼ふものは給桑といふ事を呑み込んで居れば決して失敗はない即ち一番の心髓と云ふものは給桑である、給桑と云ふ事は單に桑を給するといふ事であるが細分すれば澤山あります、其元を考ふれば吾々が御飯を喫ふのと同じ事で蠶兒が空腹を訴へた時は充分に喰はしてやるよう外になり、然し此の簡單なる法が伸び

熊本城字土樣

く六ケ敷い話になつて大部議論がある、即ち全芽育、全葉育、剪桑育に於ても四角、四角時には、長方形のものが宜しいとか云ふて居る、此れは枝葉の問題で其根本は給桑であるから、四角或は三角若しくは全芽でも差支ない、例令吾々が餅を喰ふにも其切方が圓かろしが四角でもよし其風味其滋養といふものは變る處がない、然し外に關係するものが

あるけれども先づ其根本は適當の時期に適當の分量を給するに過ぎない各地養蠶家に就て聞くは大層間違つて居る點が多い、桑を給するに何を標準として居るかと云ふに、例令八十度の時は何匁を給すると云ふ風に一定の種傳になつて居る、然しが此の反對の意見を言へば蠶沙に給桑するにあらずして蠶兒に給桑するのであるから蠶沙には關係はない、蠶兒が空腹になれば桑を給するに過ぎぬ、寒暖計を見て給桑すると云ふ風にすれば間違がないから必ず蠶兒に聞きて飼へといふ事に致したいけれ共寒暖計を見るも蠶沙によるも絶對に非ず蠶沙を清潔にするといふ事は必要だが蠶沙の乾濕によりて給桑の時機と思ふては大なる誤解である、故に春夏秋蠶の別なく此の理を應用せば宜しいのである、然し蠶兒の空腹を見別けるのは困難で又見別け廻いものである、而倒しても蠶兒に問ふて給桑する必要がある、結局眠起を知らぬものは蠶兒を知る事の出來ぬは論ふ事が出來ぬ理である故に其理を解れば、春夏秋共他に種傳はないのである、然し蠶沙と云ふと此を詳ひ現はしたる蠶兒は如何なる時に空腹を訴るかと云ふ事は困難であります故に蠶沙は常に其點に御注意なさる樣希望いたします。

鳥取島根兩縣下の製絲業

道常會員
生絲檢査所技手　德田實也

鳥取縣

一　製絲業の大勢

鳥取縣の生絲は本邦生絲中優等なるものにして愛媛、山形縣等の優良品と其聲價を爭ひ市場に於ける一方の重鎮たりと雖も其産額に於ては未だ關東の如き斯業の盛なる地方に比し大に遜色なるを免れず、然れども近時當局者の奬勵と當業者の奮起せるに相待つて年々歩一歩の徑路にあり今最近五ヶ年間の産額を示せば次の如し。

年次	繭量	産額
明治三十六年	二四〇五九	二六、七五七
同　三十七年	二六、七五七	二四四
同　三十八年	三〇、五一二	三三〇
同　三十九年	三三、三八九	四〇〇

同　四十年　三八、二八二　四八〇

蠶家一戸の收入増進せるを見れば明に斯業の進歩を想像するに餘りあり次に生絲産額を見れば。

年次	器械繰糸釜數	戸數	釜數	製造額	價格
明治四十六年	器械及足踏				
同　三十七年	同	一	一	一、七五〇	一七四、七五〇
同　三十八年	同	二	二、八八	二、三五〇	一七、六五〇
同　三十九年	同	二	二、七五五	二、四九七	一三、三五五
同

を得べく是等の關係より以て今日共撚式の依然採用されつゝあるものならん。

繭の乾燥に就ては乾燥器として精巧なる設備なしと雖もそ原因と見るべし。

此地方の共撚及ケンネル裝置は普通臺に据へ置かれ移動し得べし、彼の前臺に取り付けられたる者にあらざれば作業上或る場合には便利を感ずべきも亦其位置の寸法角度等に變化にケンネルの移動して爲めに生じたること多く殊に激數等にも注意を要すべき點多く

原料の生繭は生繭に對し一割五分多きは二割のあり、原料佳良なると撰用に嚴重なるにより屑物は左程多からず、然れども工女技術の精否により大に關係を生ずべけれ此點に對し各工場一樣ならず、

原料の佳良なる者は往々ビ節を生ずるなりビ節は——の如く數繰の内一繰直く他の數繰に比べて是れ原料佳良なる繭は強靭にして工女が繭の終はるに至り所謂蛹と稱する處に至り之を除去して屑として屑物とする際措処に困難一般に山陰道を通じて例の改良又昔（又陰又昔と呼ぶものなり）にして一樣なり、この良なる原料を交通不便の爲め多くの外來の繭を撰亂せらるゝことなくして撰み取ることを得るなり以て山陰繭生繭の價値は實に此原料の賜なり。

木綿の蠶作は初め佳良なりしも終はりには多少劣れるものを見たり、冥秋蠶も春蠶の如く良好なりしも故に一升百十匁位と雖も一昨年來の蠶繭の價格は一升七十三四匁五分位と下落し一般に蠶繭の高價なりしは一般に製絲家の苦痛とせる所なりし。

岡實の時當大噴新山蹟

以て其際一線は引き緒められ他ものは強めらるゝを以てビ節を生ずることあり、又工女が繰度膚整の目的を以て未だ繰取るべき繭を即ち過半繰取りたるものを引き切り繭の新たらしき繭を付け更ふる等より例の引切り繭を付け加ふる等繰度の配合上の必要より未だ充分蛹たる繭を付て捨つべき部分に至らざる前之を切り去る時前陳の事情にて比較ビ節を生ずるものなれば比較的優良絲にビ節を多くとあり、サレバ此ビ節を除くの目的を以て山陰製絲場にありては數年前紅主の發明に小さき鋏（ボタン）の側に集絲器（ボタン）の鋏を付屬し指頭にて引切る時此鋏にかけ切りとなる明以來大にビ節を減じたりとの說あり注意周到なるものと云ふべし。

生絲揚返の如きは一般に設備の揚返を設備す、揚返の乾燥充分にして一般に注意周到なる。

東裝は男工女工交りて一時間四十本位を捻り得るものあり山陰製絲場の捻道は一種獨重にして捻のチョコは最初にて原料は豊後の繭を以て捻り上げ之を去る、又竹の茶のみ（煎茶の際茶を拘ふ器）の如きものを用ゐて殆んど器械的に捻り上げるなり其

捻り方も有撚にて其方法の丁寧なるは一の特色なり然れども手工巧に達せるものはかゝる手數をかくるの要なからん。

原料の佳良なるは實に山陰製絲の産價を揭げたる主要の原因也、一般に山陰道を通じて例の改良又昔（又陰又昔と呼び

山陰道は交通不便の地なれば他府縣の原料購入の競爭者入り込むもの多からず殊に隱岐下一縣の如き原料は豊後繭にして他府縣に外征するの必要なきなり、尤も少數のものも兵庫の一部但馬方面に向ふものなり。

原料購入に就ては割合に苦痛なし、是れ此地方製絲經濟の一大援軍にして良繭なるも稀なるも係らず交通不便の爲め外部の侵略を免れ得るなり。

繭の購入に就ては土地の仲買人を使用す山陰の製絲場の如き仲次業に依賴し仲買は養蠶家を直接に周旋料を得るに過ぎず繭の購入費及殺蛹乾燥費を通じて凡そ一升三錢乃至四錢の經費を要す、即ち養蠶家より一升七十錢の割合となるなり

原料は曾木乾繭を爲しブリキ鑵に入れて貯藏するもの多し山陰製絲場の如き原料に就き非常の苦心を爲せり、最初縣

賣買は養蠶家と製絲家も直接に仲間の周旋料を得

立原蠶種製造所（原蠶種の事後章に部設す）より原種を得て之を自ら飼育し一般養蠶家に配布す、其數の年平均三千枚に達す而して其繭を買收す買收したる繭は一々ブラキ鑑（石油鑑）二箇に分ち一箇宛に造りたる繭の之に外部ベンキ塗と凡そ一繰（繭八百斤入一箇代六十錢）に詰め繭製人を乾燥もて一々記號し又地方に出張して買集なる時は其地方名を詳しく記し繰糸に繰糸するまで區別を正せり而して一工女に担ぎ繰糸するなり是れ如斯して其地方の製産者の繭を繰糸するなり（未完）

製絲業家と輸出業者との直接取引
本會評議員
三井物産會社横濱支店長　北村七郎氏談

製絲業家と輸出業者との直接取引

我會社で先年より少し計り製絲業家より直接生絲を買入れることゝなりましたが、是は素より小部分のもので大部分は矢張横濱の問屋より買入れて居ります、此製絲家と直接取引を爲しますのは製絲家の方では、問屋に拂ふ口錢を出さなくて濟みまた會社では其製絲場の生絲を獨占て買ふと云ふ樣に双方の利益問題のみの如く外からは見ますが、是は外から思ふ如く當方には決して利便はないのです、矢張横濱問屋に買入れるのが撰み取りさして品が揃ひ、其上値段も出來得る限り値切りて安く買さうさすると云ふ利益問題から斯り出しました事なれば決して大利益とは考へませんが、當會社の取引は成程製絲業者に取りては大利益と考へますが、然らば何故にかゝる事を通つて居るかと云ひますと、ソコが吾々の理想から來た事で聊か本邦生絲の改良の助けとなりたい愛心であつて、是が爲めに年々相當の經費を投じて改良に努めて居ります、つまり製絲家と問屋の間とは直接其生絲に對する批評等も起らず、偖又其生絲に對する缺點があつて海外要求地及會社の如き買者より申出づる事が出來ぬ樣に通ずるよりは一々詳細に製絲家に直接申送りて製産者に取引をさせる當方よりも直接製産者に横濱へ出て來て貰げ或は製産者と直接取引をする時は現狀の有樣を見せかゝる處は斯樣べしとして一々實絲に就て直接改良の相談をさすれば本邦生絲が益々改良されて品位を高め、從て價値を進めて行くのである、素より經費上餘地のなき所は如何でも致方がありませぬが、折角良なる原料と安き工賃により今一層技術上の改良を塗げ利益を進むる事が出來るものを〻〳〵打やつて置くと云ふ惜むべき品物もまだ多くない樣です凡そ製絲改良の要旨は先づ第一に海外需要地の嗜好に投ずるを目的とするものである、而して其嗜好即ち流行の變化なるものが海外では其が尤も克く海外需要の趨勢を知悉せる直輸業者と製絲家とは實際尤も必要の事である、殊に製絲業者と繭商との事を聯絡して不絶轉化する、ものなれば製絲家は常に

日本に多き病

醫學士　田中好治

櫻は散り菜種の花の盛りも過ぎて桑の若葉を吹く風も暖かい今日此頃は生き生きした自然の活氣が人間の身體にも滿ち渡って概して春は病氣の少ない時期である、併し日本名物の一つである脚氣病もぼつ〳〵始まって來たし、梅雨の時期も近付いた事故、「マラリヤ」の注意もせねばならぬ。

脚氣病

脚氣病の歴史は中々古い物で、支那の書物の中には既に千七百年前に記載されてある、日本で最も古い記錄は千二三百年前の物である、併し詳細に研究されたのは漸く三拾年前である、世界を通じて脚氣の多い地方は東洋で殊に極東の諸島、支那の海岸に近き地方、朝鮮、東印度、「ブラジル」、「アフリカ」、「ペルー」の一部分等で、西洋には極めて稀である。日本も今は有名な脚氣國であるが、以前は唯海岸に近い五六の都會に限られて居た物である、然るに文化の進むに連れて、常勢いて四方八方に廣がり北は奥羽に迄及び、海に接し、山に沿ひ、海に沿ひ、遂に海を渡って北海道に迄及び、海に接し、山に沿ひ、海に接し、

次に地方に非常に多い病氣である「マラリヤ」に就て述べやうと思ふ、物の例へに「蚊に刺された程で」は無いと云ふが蚊も種類に依つては中々恐ろしい物である、蚊の種類は數多あるが「マラリヤ」熱の媒介をする物は、「アノフエレス」と云ふ種類と異なつた點は、身體が長く、體に近付け、身體は弓狀に彎曲し、翼は多く透明無紋で、脚も尾も共に長く、反之、他種類は頭も尾も共に壁に近付け、身體を眞直に保つて居る。

すること、出來るが「アノフエレス」は「マラリヤ」熱の媒介をする物は、「アノフエレス」と異なつた點は、身體が眞直で脚も尾も共に壁に近付け、身體は弓狀に彎曲し、翼は多く透明無紋で、

青菜料理

大日本割烹學會員　石井泰次郎

水菜の酒煎の搾方

水菜は（京菜ともいよ）一かぶを能く洗ひて、一寸位づゝに切りて、鍋に酒を入れて、其中に入れ、（よく水のしづくなきやうにして入るゝ）火にかけてよく煎りつけ、それより醤油を加へ、砂糖を加へて味をつけ、取おろして、盛りて出すなり、其わり合は。

京菜一かぶにつき、酒四勺、醤油四勺、砂糖十五匁のわりなり、但し菜のやわらかき所のみを用ひてつくるべし。

芹燒のこしらへ方

芹を小一把を洗ひて、一寸づゝに切り、鍋に胡麻の油を煮たてたる中に入れていため、二分間ばかりして、酢を入れ、砂糖と醤油を加へて味をつけてよし、

原料割合は、芹小一把、胡麻の油二勺、砂糖五匁、醤油、

菜菁菜のあへ物の搾方

みつばせりを洗ひて束ね、煮立ちたる湯鍋に入れ、直ちに出して、水に取りしぼりて、一寸二三分づゝねづつに切り、煉り味噌にて和へるなり。

みそのわり合は、みつばせり一把（十匁）、甘味噌二十匁、砂糖五匁、みりん酒二匁内外、水二匁、酢一匁、甘味噌を摺りて、うらごしになし、鍋に入れ、砂糖、みりん酒、水を加へて火にかけてよく煉り、ねり上りに酢を加へて味を試みて、火よりおろすべし。

蒿苣のごまみそあへの搾方

ちさを洗ひて、養を湯をくゞらせ（熱湯に入れて直に引き上げてよし）こまかく切り、ごまみそにてあへるなり、胡麻味噌のこしらへ方は、前の煉りみその如く、つくりたる中へ黒胡麻をいりて摺りたるものを入れ、よく煉りまぜてつくるなり。

其割合は、黒胡麻五匁につき、味噌あまきもの二十五匁砂糖十五匁、みりん酒二匁五匁、水二匁五匁、くらゐにてよし。

同酢味噌あへ

此こしらへ方は、右のごま味噌あへの時の如く、こまかに切り、みつばせりの酢味噌と同じつくり方にしてあへてよし。

よめなの鬱粟あへ

よめ菜は、あしき葉及び塵等を去り、よくあらひ、湯鍋に入れて湯煮するなり、菜のやわらかき時は白湯にて湯煮してよろしけれど、もしこわき時は炭酸ソーダを少し入れて湯煮

すべし、さてやわらかにゆだりたらば、桶に水を入れ、其中へとうつし入れ置き。

一方には、けし子、塵、砂等を去り、（目のこまかき毛ふるひに入れてふるひ、砂を落し、塵はひろひ去り、水にて洗らひ目のこまかき篩などに上げて水を切り、日に乾かして用ふべし、煙草にてこげすきぬ程に炒り、すり鉢に入れてよく摺り鍋に入れ、別に摺りてうら漉しなしたる白味噌も共に其鍋に入れ、みりん酒、砂糖、水等を加へて火にかけ、木杓子にてよく煉り、かたき程に煉れし時、鍋をおろし。

前の水に浸し置きたるよめ菜を、水をきり、かたくしぼり、けしの鍋の中に入れ、箸にてかきまぜあへて、器にとるべし。

其割合は、よめな八合位に、けし一合、白味噌五十匁、砂糖二十匁、みりん酒三勺、水三勺位なり。

懸賞

一口噺披露

（第四回）

天賞

山口　黄波

寫眞屋『そう動いてはいけません今寫しますから』

田舍者『當世流行の活動寫眞にお願したいのて』

講定

害蟲驅除法

學術委員
驅蟲研究所技師　農學士　明石　弘

五　蛞蝓類の驅除

蛞蝓類は桑を害するものは其種類多く、「クハコ」「キンケムシ」「ヒメノケムシ」「クハゴマダラヒトリ」「幼蟲亀蟲」「キハラゴマダラヒトリ」「ヒトリガ」「フタスヂヒトリ」「ウススヂモンヒトリ」等である、此内其害の甚しきものは前四種であつて、「キハラゴマダラヒトリ」以下のものは其發生の甚しからぬと、其加害の時期が夏秋の頃である爲めに被害は少ない、且「フタスヂヒトリ」「ウススヂモンヒトリ」に就ては會報百八十八號「論説中」に記載して置いたから茲には省略することゝする、其驅除法の如きは略「クハゴマタラヒトリ」に準して行へば過支なかない。

（一）クハコ

經過習性。「クハコ」は蠶兒によく類似し黃色の濃厚なる俗に項部と稱する體軀の第二第三環節の著しく膨大せるとにより區別することが出來る。「クハコ」は桑園に至るの春期より晩秋に至る迄常に目擊さるゝ所のものであつて然も其發育の程度を異にせる種々の大さのものを見出すことが出來る元來「クハコ」は桑の枝條に產附せられたる卵を以て越冬するものであるが其孵化の時期に非常に早晩があり、例へば早いものは四月下旬孵化するに反し遲きものは六月に至つて初めて孵化するものもある。又同時に孵化したるものと蟻食慾の多少に因つて發育に亦差違がある、之が桑園に於て大小種々の「クハコ」を目擊する理由である、又「クハコ」は普通二化性であるが場合によりては三化することも亦一化に止まることもある「クハコ」が老熟すれば枝條の股や或は桑葉を拾いて其內に淡黃色の粗繭を營み化蛹し二週間後で其內から蛾が現はれる、蛾は蠶蛾によく似て其著色の濃厚なると活潑に飛翔し得ることが異なつて居る、此蛾が桑の枝條に數個若くは十數個宛其卵を產附する卵は形態著色等蠶の卵とよく似て居る、普通此卵は其年內に孵化し幼蟲は其害を過らし再び化蛹羽化產卵するものである。

上野ぶんを子

第十二回に所謂國產水純粹野蠶正方行品等選拔技巧標點上以明視彩表蠶功會來で以て故のくゝ愛人藝名の彩表蠶功り依に

驅●除●法●防●「クハコ」には一種の寄生蜂が存在し形の卵を「クハコ」の皮膚に產附け此卵より孵化した其幼蟲は「クハコ」の體內に寄生して之を斃すことが多く西ヶ原附近に於て秋期桑園に於て採集せる「クハコ」は其卵を認めもの、方が少ない位で多きは一頭の「クハコ」に二十餘粒も產附せられたるものがある、此寄生蜂の寄生は決して少なくないのである。

蜂●蛹●蛾●蟻●蠶●繭●形●卵●寄●生●蜂●

（二）キンケムシ

經過習性。「キンケムシ」は黃赤色の縱線を有する美麗な毛蟲であつて幼蟲の狀態で結束間の枯葉や刈採面の凹所等に於て越冬し早春より桑芽、葉を害するものである、此蟲は一年三回化蛹して成蟲となる、成蟲は白色小形の光沢ある前後羽化して交尾後日を經て產卵する、卵は葉の裏面に直射せざる枝條或は其上を腹部の毛を以て蔽ふものであるから一個の毛塊の狀を呈し之が孵化して再三加害をなすものである。此蟲に對して注意しなければならぬのは其刺毛を有すること此蟲の螫すのは勿論其刺毛に毒を有し其毛が飛散して人體に觸るれば痛痒を感じ又蛾の毛にも毒を有し其毛が飛散して人體に觸るれば驅●除●法●防●「キンケムシ」には一種の寄生蜂と二種の寄生蠅と

寄●生●蠅●の●繁●殖●に●任●ずべきである、尤も夏秋蠶に此蟲害を被る地方で右に更に考究を要すべきは勿論である。

寄●生●蠅●の●繁●殖●に●任●ずべきである、尤も夏秋蠶に此蟲害を被る地方で右に更に考究を要すべきは勿論である。

（三）ヒメケムシ

經過習性。「ヒメケムシ」は黃赤色の縱線を有する美麗な毛蟲であつて幼蟲の狀態で結束間の枯葉や刈採面の凹所等に於て越冬し早春より桑芽、葉を害するものである、此蟲は一年三回化蛹して成蟲となる、成蟲は白色小形の光沢ある前後羽化して交尾後日を經て產卵する、卵は葉の裏面に直射せざる枝條或は其上を腹部の毛を以て蔽ふものであるから一個の毛塊の狀を呈し之が孵化して再三加害をなすものである。此蟲に對して注意しなければならぬのは其刺毛を有すること此蟲の螫すのは勿論其刺毛に毒を有し其毛が飛散して人體に觸るれば痛痒を感じ又蛾の毛にも毒を有し其毛が飛散して人體に觸るれば驅●除●法●防●「キンケムシ」には一種の寄生蜂と二種の寄生蠅と

一、冬期結束間枯葉若しくは刈株面に於て越冬しつゝある幼蟲を殺滅すること。

（三）ヒメケムシ

經過習性。ヒメツノケムシは其形態著色等「キンケムシ」に類似して居るが背面に白色の短毛束を有すること、體軀の前後より黑褐色の長毛束を生ずるを異なりとす、一年二回發生するもので卵態を以て越冬し春期幼蟲發生して桑葉を喰害し雄と雌となるべきものは四回の脫皮を終て六月上旬の頃老熟して暗灰色の粗繭を營み化蛹し成蟲となる、成蟲は體軀黑褐色で翅端に小枝顏る長く雌蛾は雄蛾よりも形稍大きく體翅共に帶黃白色で

害蟲驅除法 25

一、冬期結束間枯葉若しくは刈株面に於て越冬しつゝある幼蟲を殺滅すること。

一、枝條の間に營まれたる粗繭を採集して其蛹を殺すこと。

一、其產卵時期に卵塊を採集潰殺すること。

一、幼蟲は背面美麗なる黃色を呈するから桑園を巡視して之を捕殺すること。

一、枝條の間に營まれたる粗繭を採集して其蛹を殺すこと。

一、其產卵時期に卵塊を採集潰殺すること。

が合つて此等の害に天然に於て斃死するものも少なくないが尙次の驅●除●法●を行ふがよい。

一、幼蟲は背面美麗なる黃色を呈するから桑園を巡視して之を捕殺すること。

一、枝條の間に營まれたる粗繭を採集して其蛹を殺すこと。

一、其產卵時期に卵塊を採集潰殺すること。

一、春夏秋に亘りて桑園を巡視して「クハコ」の捕殺に勤むべきこと、但し此の際集動不活潑なるもの若くは斃死せるものの脫皮甲することあるを以て此等は其儘放置して蛹として記載せられたことがあり予も一昨年來調査した事實を蠶事報告（東京蠶業講習所發刊第三十三號に記載して置いたから、詳細は此等の書に據て承知せられたい）

一、冬期桑の枝條に產附せられたる卵を採集潰殺すること。

一、春夏秋に亘りて桑園を巡視して「クハコ」の捕殺に勤むべきこと、但し此の際集動不活潑なるもの若くは斃死せるものの脫皮甲することあるを以て此等は其儘放置して蛹として外一昨年來調査した事實は以前佐々木博士山崎博士遠藤蠶の寄生害を被つたのである、此蛹に就ては支那蠶の寄生に關つて置くが此蛹も夏秋の頃室內に飛び來つて蠶の皮膚に產卵し寄生することがある、此の事實は昔から支那等に於ては一昨年新潟縣北魚沼郡銀山平に於て初めて此蛹に就て我邦では支那蠶の寄生害を被つたのであるが一昨年來調査した事實は以前佐々木博士遠藤蠶の寄生害を被つたのである、

翅には淡褐色の斑紋を有して居る、雌蛾は翅力弱く殊に強く蚕間と雖も施特飛翔し、雌蛾は交尾す雌蛾は翅力弱きも雄蛾は

は、白色の卵を附近の桑葉枝等に産せられたる卵を焼殺すること。

一、雌蛾は往々蚕と雖も飛翔す

の発育一層不完全であつて脱皮後其繭より飛去ることが出来ず其繭の上に滞卵せるものである、此繭の上に群産せられたる卵は冬に越して翌春幼蟻の発生を見るのである。

駆除豫防。次の数法を行ふがよい。

一、幼蟻は「キンケムシ」と同じく美麗の着色を有して居るから探集捕殺すること。

一、冬期蛹幹の裂隙等に隠れたる繭を捜索して其上に群産せられたる卵を焼殺すること。

一、雌蛾は往々蚕と雖も飛翔す

拘殺すること。

（四）ゴマダラヒトリ

繭過習性。「ゴマダラヒトリ」の幼蟻は俗に蚕蟻と稱するもので其養生區域の廣きと加害程度の激甚なるとにより桑蛞蝓の名稱を附して居る力もある、「スムシ」は淡黒色の毛を被生し之が結果の間や刈株面等に於て面は黒白の長毛を被生し之が結果の間や刈株面等に於て越冬し早春から現れて害をなすものである、六月上旬に至ると「スムシ」は老熟して土際に降り灰色の粗繭を營みて其内で蛹となり八月中旬の頃之から成蟲即ち蛾が脱出する、蛾は雌雄大さ及び着色を異にして雌蛾は體翅共黒褐色で翅には黒

鈴木サナ子

以年十二に所絲製口谷蠶城炎の正方行品等優秀技上繭製上に関規影養蚕功績者本で以て故く功績表蚕功績者受な

駆除豫防

一、冬期蛹幹の裂隙等に隠れたる「スムシ」を探集捕殺すること。

一、八月の頃枯葉と共に焼殺すること。

一、八九月の頃樹幹の頭に近き桑葉の表面に産付せられたる卵塊を探集して其内の卵粒を潰殺若しくは焼殺すること。

一、九月頃孵化せる幼蟻は蚕を張りて其内に群居するもので別々に桑葉を喰害するものであるが夜間若しくは雨天の日等には群居繋伏して居ることも往々見受ける。

駆除豫防

一、冬期蛹幹の裂隙等に隠れたる「スムシ」を探集捕殺すること。

一、冬期蛹の下に群居潜伏して居る「スムシ」を焼殺すること。

一、九月頃枯葉の内や刈株面に落葉の下に群居潜伏して居る「スムシ」を焼殺すること。

一、九月頃桑葉の表面に産付せられたる卵塊を探集して其内の卵粒を潰殺若しくは焼殺すること。

一、九月頃孵化せる幼蟻は蚕を張りて其内に群居するもので

あるから之を捕殺して翌春の加害を輕減すること尚早春と雖も最中に群居するものを探集捕殺すべきである。

一、蛾は燈光に集まる性質を有して居るから誘蛾燈を用ひて誘殺すること。

●新絲以來生絲輸出高

横濱に於ける萬一千四百九十四俵輸出せるが、仕向地及び内訳は左の通り

仕向地	明治三十年	明治三十一年	明治三十二年	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	明治三十六年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
倫敦	二百十二	二百十一	二百十一	三百十一	三百十一	五百十一	八百十一	百十一	百十一	百十一	百十一	百十一	百十一	百十一	百十一
歐洲	七二	一一	六一	二四	一二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
米國	一五四八二四九三五七一〇	五四五〇七五六一〇七二六九九	六一六一七五八一〇七五三八五五八	二四一二三六六一七一〇	二三六一一三五五〇	二四一二三一三五八〇	七八二四九七一〇五〇三	二四一二三一三五八〇	二四一二三一三五八〇	二四一二三一三五八〇	二四一二三一三五八〇	二四一二三一三五八〇	二四一二三一三五八〇	二四一二三一三五八〇	二四一二三一三五八〇
計	五一四九四一一四七〇五四四六七七一一七五七二四四一三八九五一七二五二〇五一〇	八一一九四三一四一六三一一六六七五〇四四二八四一一八一〇三一〇五一三七四六九一〇七七七七五五四〇四四四〇〇一三六三四六一二八一一一九八一六〇五〇八〇四六五二一一五二七〇三三五五一〇七五五四〇	二一二一一一

を暗誦しよく婉轉の玉音を弄して父母隣人を驚かしめたり。五歳讀書を始め六歳習字を學び九歳四書、五經を讀破するに至り ぬ。然れども父母其病身の故を以て之を止め代ふるに基、將基、綴句等を以つてす、而かも君の百事に堪能なるよく其妙處を探り轉た人を驚かし七歩の才も亦早く鄭黨が長夜の話柄に上るぬ。嗚呼古聖と雖も十五歳病を以て學に志すといへり而かも君未だ旬年に及ばずして此の事を爲す君ならずして誰れか能はん。

然つて初旋黄昏の星眼に有り六尺の男子を友として而かもよく彼等を呆然たらしむるもの君が幼時として又當に然るべきのみ。

幸は貧困の裡に在り

庶弱風にも耐堪へざりし君を父母の慈愛よろしきを得て漸もなくて十一歳の春を迎へて才名益々高かりしが悲風三尺の草草を吹いて雲西に飛ぶ夕君が一夢に心に用ひひし父君不幸にして溺死として卒られぬ、君が悲嘆夫れ何を か加へん讀書に耽る旦も之を叱るの人なく、奇言夕に人を驚かすも之を厭ぶの人なく、幽明の隔程正に無窮なるを恨むのみ。固より豊ならざりし家益に至り て漸く甚しく僅に母堂の製絲織物の内職をなすによりて之れを支ふるに至りぬ。而して悠悠たる君書、算を廢せず母を扶けて傍ら之れに勉めたりしが、母の製絲するを觀て大に感ずるところあり之れより幼心にも意を之れに傾け漸くその利あるを悟るに至れり。あゝ、之れ後年君が製絲改良に悉し遂に名を斯界に走するに至り父母の名を擧ぐるに至り動機なりしなり。之れに依つて之れを觀れば孝の貧困の裡に在りといふものか眞に近からずや。

櫻木しよよ子

技術優等品行方行品の故を以て會本で以て紋章を受く
表彰紋章に使用せられし

生絲改良の緒を開く

君十四歳の春を迎へて元服し十六歳の夏を迎へて術を學ぶ一刀の撃、砲の一矢の射、悉く之れを過たず遂に擧げられて高輪一之進場大砲方となり名を揚げ二十歳又請曲を役を勤め廻へて廿五歳を數ふるや彼の生涯の變あり。廿四歳一度び東西に轍を轉すること晝夜を舍かず、廿六歳舊主の爲めに京都に至るに隨ひて上洛し公務の餘暇を以て學を洛の消息に拘び頗る後れるところあり。時に秋風起つて白雲飛ぶ同年の九月世は草木黄落して蕭然たる冬の間に入るや君は故郷に歸へるを惜しむ中に新に石濱氏が迎へて君のみ一人永への春を導くに至りぬ。時に維新前の風雲暗澹として吳越何ぞ撮に異といひ成は國運南と論じ天下の驟に援ぶ甚しからんとせり。翌年舊主の居を邢馬駐前橋城に移すや君も亦移りて同地に到る、藩中事漸く繁く急忙遂に一瞬の閑を假さず。君亦主の君の爲め身を忘れて粉骨身内外に奔走して百事至らざるなかりき。廿歳明治維新の事あるや軍兵千餘人を率ひ北陸の斜に合して之れを再四武功甚だ多かりき。後舊藩の敗府を二局に分つや君擧げられ内局の議員となり又說得紙正探索使命に任ぜられ屢々主の命を享けて横濱に往來し之れより生絲改良の端緒を開くに至り又、時に明治元年維新の光明之れよりか かんとせる頃なりき。

木村けさよ子

技術優等品行方行品の故を以て會本で以て紋章を受く
表彰紋章に使用せられし 詳細馬群馬郡高崎町

二本松製絲會社を起す

明治二年始めて自ら當代國に至り此の生絲を買集めて以て得失、利害の奥秘を叩き大に覺るところあり、乃ち翌年新に外人を雇ひて器械製絲を始む。然るに當時既に斯業に志すもの多かりしか君の此の事あるを聞き、來つて其の教を受け術を學ばんとするの市の如くに明治四年に於て君の教を受け氏を始めとして信州上田藩の傳習生も來り頗る盛なるものあり。時に當時南校教師なりしメチョル氏親しく製絲器具二十組を寄贈し得るに至りしより長野氏、大寿、川端、星野、長太郎氏、馬場氏、福山藩、素軒、藤氏、安藤、今日の製絲氏、津山藩等の世に注目を引けり。然るに明治六年に至りの稲島、今君が非凡の才と製絲上に於ける技術とを賛稱し新に同縣下に一大製絲場を起して百方言を盡して始めて君を聘せんとせり。君頑として應ぜず百方言を盡して之れを以て君の決心を動かす能はず遂に成れるものの之れ吾製絲業史に一大偉彩を放てるこの二本松製絲會社なりとす。

（未完）

英國に於ける絹織物製造及原料（蠶絲）購入の狀況

總裁殿下昨卒出發大使として御渡英あらせられたる際英國に於ける絹織物業の現況に關し駐英野大使に御下問あらせられたるに對し同大使は何れ調査の上御報答申上べく旨答へられたる由聞て本誌に載せる處なるが其後大使は英國政府發表の報告並に國民改革協會報告及其絹織物に關する調査報告を殿下へ奉られ殿下には之を見に松平會頭に御下附あらせられたるを以て其中より當業者談話の要領なる一節を左に掲載することゝなりたり

（一）織物

英國に於ける絹織物の需要は極めて大なるものなるも其仕中入れは之を大陸地方就中佛蘭西、伊太利、瑞西等の供給に須つものにして、英國内地の製造に係るものは僅に其一部を補ふに過ぎず、隨て英國絹織物等としては特に視るに足るもの頗る乏しきが如し、其原因は一にして止まらざるべきも主として、（一）英國の蠶絲製産地にあらざること、（二）英國女工の比較的不器用にして稍や勤勉を缺くこと、（三）現行關稅政策の三者に由るものと言はざるべからず。

英國絹織物製造地の最も重なるものは北部英蘭「マックルスフイールド」にして、概言せば英國に於ける殆ど唯一の絹織物業地と稱するを得べく、サー、トーマス、ウオードル氏は同地の有名なる織物業者にして熱心に斯業の發展を企畫しつゝあり、其製品は主として「ハンカチーフ」海軍、水夫用襟巻、襟飾、裏地、シャツ類、窓掛等にして婦人晴用向き織物等は殆ど製作せずといふ、而して是等製品も何等外國用に比し特徴を有するにあらず、製造高の如きも、茲に數字を以て明示し能はずと雖も、要するに全輸入額に比し其一部を除き其隨て輸出の如きに至ては再輸出を除き其一部分のみに過ぎざるべし、而して英國に於て製造せられたるものゝ外國に輸送せらるゝ高は極めて少量にして特に掲記するの價なし。

（二）蠶絲

蠶絲は主として佛蘭西廣東ベンガル等より輸入せらるゝものは、僅に少部分を占むるに過ぎず、又大陸地方より撚絲として輸入せらるゝ物の内に日本の蠶絲を合むと雖も、固より多大の數量にあらず、蠶絲の輸入年額は凡百斤乃至百三十斤入の數七八千斤なりと云ふ。

絹織物業者は其原料を倫敦に於ける輸入商の手を經て購入す故に蠶絲の買入に關する特別の取引法は市場等あることなし。

（三）人造絹絲

人造絹絲製織物は佛蘭西獨逸等に於ては多少世人の注意を喚起し居るもの、如きも聞く處に依れば、右は全體に其製作未だ巧みならず、價格亦割合に不廉にして商品としては未だ頗る幼稚の境にあるものと云はざるべからず、要するに英國に於ては未だ人造絹絲製織物を顧みる者なしと云ふも蓋し過言にあらざるべし。

●桑園霜害豫防組合設置

本年は晩霜頻繁の虞あれば養蠶家の尤も警戒すべき年柄なり宮城縣にては過般招集したる蠶業協議會に霜害豫防に關し訓示する處ありたるが即防霜組合設置の議を掲出し桑園所持者並に作者に之が勵行を促せり豫防の方法は包被又は燻烟法に依り組合長指揮の下に豫防委員をして氣象觀測及包被及燻烟材料等の準備に當らしめ發芽の時期より凡三十日間晝夜交代觀測し等氏寒暖計四十三度以下に降らんとするときは午後十二時頃に組合長に急報し組合長は同時に一定の合圖を以て之を通知し豫防に從事せしむる計畫なりといふ。

桑樹心止りに就き質問

旗本縣 通常會員 上塚眞熊

（一）當地方に於ける刈桑は六七月の交身止りとなりて、元一本の幹より、四五本の枝條を生じ、其葉細くなるのみならず養蠶中摘桑に手間を費す事甚だし、そは害蟲の所爲とも思へども能く分りませぬ、其原因及豫防法あらば御教示を願ひます。

（二）草木の灰に人糞尿と混合すれば、肥料の價値を減ずるとの事なるが大豆粕等にも、灰を混合すれば、右同樣の結果ではありますまいか、是又御教示を願ひます。

答

學藝委員 眞學士 明石弘

（一）實物を見ざれば確答し難きも櫻蟲（coccidomyia）の幼蟲たる微小の蛆の害のやうである。該蟲に就ては未だ研究記載

せられたるものなれども、其經過に就ても未だ詳かならざれども、根際の裂隙等に於て越冬するものらしい、故を以て該部を撰索し存在を認めたれば石油等を塗抹するがよい。

(二)木灰を混ずるも人糞尿及大豆粕の價値を減ずるものではない。

魯桑中刈仕立に就き質問

三重縣 西山幸吉

魯桑の中刈仕立の方法及刈取の方法に就きて伺ひたい。

答

學藝委員 農學士 林驛作

魯桑を中刈仕立として栽培するには先づ接木苗の太根を切り捨て、根先を三寸乃至五寸に切り揃へ土地の肥瘠によりて適當なる巨離(畦間五六尺畦間三尺乃至五尺位)に之を植付くべし、植付は春季を可とし、約一尺五寸位の穴を掘り堆肥を施し、其上に植付け地上三四寸の所を切斷し、其れより發芽せるせの、内勢力の盛んなるもの一本を殘し成長せしめ、翌春發芽前に一尺五寸乃至二尺の所より切斷し、株蔭の位置を定める、而して刈取の方法は普通の桑園と異る株より約一寸位殘して切るを可とする尚詳細は大日本蠶絲會報第百六十六號小野元兵衛氏の說を見られよ。

蠶種取扱及其他に就き質問

群馬縣 千明馬吉

魯桑の中刈仕立の方法及刈取の方法に就きて伺ひたい。

答

學藝委員 農學士 林驛作

(一)催青したる春蠶種の既に發生せんとする時、焚火で溫度を八十度近く昇騰せしむると蠶種は乾燥して反り返り枠舟狀を呈するので、夫れを一二頭の發蟻を見るなり燒酎の消水に稀釋して裏面から少量宛の如く噴きかくると元の平面と成り取扱も都合がよく蠶兒は悉く一齊に發生して、二回に掃下す樣なことはありませんが、併し斯くしまして蠶體生理に害は有りますまいか、若し有りとすれば、如何なる病徵を何時頃出現するもので有りませう、御教示ありたい。

(二)春蠶が卵より發生したとき直ちに觀察すると蟻の色澤に黃色のものと黑色のものと赤色のものとの別のあることがありますが、之は如何なる原因に因るものでせうか、又蟻の色澤は如何なるものを正しいとするでせうか、御高敎ありたい。

(三)吾地方に在て方言羽蟲(蚤に酷似す)と稱する物が有て、屋根裏又は室の間隙等に潛伏して越年し、春暖の期となり蠶兒を捕立つる頃出て室内を飛翔しつゝ、蠶座に浸入して蠶兒を食し、蠶體成育すれば其體を傷けて液を吸取り死に至らしめ、其最も甚しいのは三齡迄ありまして、殊に眠中に在ての害鄙しく、其一箔に就き數百頭の羽蟲を見るは珍しくない、故に養蠶は一割位は豫備として掃下ろして居ります、之が驅除豫防の方法あらば御教示ありたい。

備考

地方蠶種中に蟻の混雜するものしばしばあるけれども、其多くは生産家用の蠶種風情にして、年數後二三十年間も其儘になしかく飼其

卵を焼きたるものよりよいのです、由て一度蟻の出たものは全部焼捨てなければなりません、蟻の出ないものは、蟻の出ないものは、蟻の出ないものは

問　答

（鯛、千鮮等の類を蓙苞に入れて簀室の天井適宜の場處に懸々懸垂し置くがよい、羽蟻は此蓙苞に集合し千蟻を食し居り、容器に出てゐるものである、故に毎日一回位づゝ之を取り水鉢上に振ひ落し捕殺すべしである、又カツホ蟲は收蔵後好んで屑繭死節繭等の中に集合するものであれば、少量の下繭を目籠に入れて蔟室に置き時々水鉢上に於て之を攪拌すれば多數を捕殺することが出來る。

裸蛹立に蠶糞に就き質問

長野縣　小根岩一郎

（一）上蔟後繭を切ずして（但し少し位絲を吐くも）裸蛹となりたる場合に、其の内容物は蛹の糞糞分となるのであるが、尤も粘質土に用ひ之が理學的性質を改良すると云ふことなれば、寧ろ之を利用するに如かず、利用しては燃料に供するを以て最上の策とする、北海道には工場に於て撹屑を使用するものもある、唯其材料屑少欠乏にして纖かざる爲めに多く使用することが出來ないのである、某工場にては日三噸づゝの粉末を使用するか、一噸五圓十錢の板摺を買入れて撹屑の搬出に困難せざるを以て、之を利用せば一日馬車三十臺宛使用としては月二十圓位運賃は一臺五錢宛として以上も積て山を撹屑の二分の方は腐熟せずに是が良好の燃料となりと云ふ、此に由て見ても撹屑のみにては普通の堆肥として腐熟せしむることは困難であると思はる。

（二）蠶糞を直ちに畑に撒き散しては、一部分は効能なれども肥料分に乏しく散の憂ひは無い者と思ますが如何でせう、又肥溜の内へ入れて腐熟せしめ施用するものもあり安全なるが、何の方が最も有效でせう、願くは其方をも百分比例にて御示しを願ひたい。

答　川島勝次郎

一、上蔟後繭を切ずして裸蛹となりたる場合には、絹絲腺の内容物は漸次變化して滑粧する、又十分に吐絲せぬものもあるが、必ずしも化蛹せぬものではない。

二、蠶糞は畑に撒布して後直ちに土を覆へば甚しき効能の憂ひはなく、又肥料の中にて腐熟せしむる時は適當の過燐酸石灰を混用し、有效分の發散を防ぐが宜しい、而して其はなく、又肥料の中にて腐熟せしむる時は適當の過燐酸石灰を混用し、有效分の發散を防ぐが宜しい、而して其損失の割合等は溫度其他種々の狀況に由て一樣でないから百分比例を示し難い。

本挽屑利用法に就き質問

群馬縣　千葉熊治

製板器械場にて挽屑となり廢棄せらるゝもの、積て山を爲して居るが、之を撹拌し積肥料として桑園に施用するか、又其可否を御明示せられたい。

群馬縣　須田金之助

答　挽屑の利用法として之を肥料に供するも腐熟すること晩く且つ成分も多くすなわち利用するに所謂少なくべきこと、信ずるのである、尤も粘質土に用ひ之が理學的性質を改良すると云ふことなれば、寧ろ之を利用するに如かず、利用しては燃料に供するを以て最上の策とする、北海道には工場に於て撹屑を使用するものもある、唯其材料屑少欠乏にして纖かざる爲めに多く使用することが出來ないのである、某工場にて余の調査する所に由ると工場にては日三噸づゝの粉末を使用するか、一噸五圓十錢の板摺を買入れて撹屑の搬出に困難せざるを以て、之を利用せば一日馬車三十臺宛使用としては月二十圓位運賃は一臺五錢宛として以上も積て山を撹屑の二分の方は腐熟せずに是が良好の燃料となりと云ふ、此に由て見ても撹屑のみにては普通の堆肥として腐熟せしむることは困難であると思はる。

資料

千九百六年度世界重要産絲額統計表（承前）（其の五）

西班牙

千九百六年度の收繭額は八十三萬瓦と計上された、其の前年即ち千九百五年度は百〇五萬瓦であつた。

千九百六年度の蠶繭を如何なる筋に賣捌つたかは左表で分明する。

五六五、〇〇〇　西班牙國に於て製絲する佛國製絲家の買入高

九五、〇〇〇　佛國西及伊太利に於て製絲する佛國及伊國製絲家の買入高

五〇、〇〇〇　西班牙製絲家の買入高

一二〇、〇〇〇　釣絲に製したる高

合計八三〇、〇〇〇

千九百六年度の收繭額は之を其の前年度に比すると二十二萬瓦即ち約二割一分の減收である。

蠶家に賣渡し又は分配した蠶種の分量は殆ど前年度と大差なしであるから、減收の原因は天候不順の一に歸するのである。

あつた、即ち三月二十一日から四月二十二日まで、一ケ月餘、毎日の雨天續きで此の間晴天の日は唯の一日もなく冷つて溫度は低く否寒ろ寒冷であつた。

就中「ヴァランス」地に於ては桑葉非常に欠乏を告げ其代價の如きも未曾有の高價であつた爲め、小規模の養蠶家は終にみす〳〵其蠶兒を放棄するの悲境に陷いつた、之れは單に「ヴァランス」地方のみに限るのでなく、概して桑樹の發育不良にして業蠶兒又粗惡であつた爲め、上蔟期に臨て軟化病が盛に流行した。

「ミュルシー」地方も亦た同樣の狀態を演出した、此の地方の蠶兒を下蔟期に臨で殆ど總て病氣に罹つたので此の病蠶を繅絲製造に用した、本年度の釣絲製造高の多額なるは全く之れが爲めである、即ち千九百五年度は八萬瓦であつたのに、千九百六年度は一躍して十二萬瓦に上つた。

西班牙の蠶繭は悉く純粹黃繭種で掛合種又は級繭は更に之を使用せず「ヴァランス」「ミュルシー」其の他の地方の養蠶家が毎年搬立る蠶種を殆ど總て佛國より輸入するのであつて、西班牙產の蠶種は非常に稀である。

蠶繭の平均の產絲量即ち繭同功繭取糸量は佛國に於ては一に對する十二瓦乃至十二瓦半にし

て、ミュルシー地に在ては十二基乃至十三基であつた。本年度に於て敢行した、蠶繭八十三萬基中、ミュルシー地方で釣糸製造用に使用した十二萬基を差引くときは七十一萬基と成る、此七十一萬基が製糸用に供せられたのである、今之を前項の產繭量を以て、換算すると、約五萬六千基の生糸を產出した割合に成る最近五年間の此の關係は左表の通りである。

年次	新繭基	生糸産額
一九〇一	九九五、〇〇〇	八〇、〇〇〇
一九〇二	一、〇一〇、〇〇〇	七八、〇〇〇
一九〇三	一、一〇〇、〇〇〇	八六、〇〇〇
一九〇四	九九五、〇〇〇	七七、〇〇〇
一九〇五	一、〇五〇、〇〇〇	七八、〇〇〇
平均	一、〇三〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇

前の平均價格は左の通りである。

	一九〇五年	一九〇六年
「ミュルシー」	三、四五乃至三、六〇	三、六〇乃至三、七五
「ヴァランス」	三、〇〇乃至三、七〇	三、八五乃至三、九〇

前表に示すが如く西班牙の產繭額は年々大差なしてある、即ち蠶繭百萬基、生糸八萬基の平均である。けれども千九百六年度は著しく減少して居る、之れは全く氣候の非常に不順なるが爲めであつて、特に例外として見るべきである。（西班牙の項終）

古屋氏の蠶兒檜飼法を讀む

農商務員　平岡政三

我邦養蠶の依間け進みつゝあり之を誠に祝福せん、員業古屋氏に見る所あり若し多年蠶兒檜飼法に、二十世紀養蠶法と稱せる然に於ては、其著元と大學子にあらず、全編該法の記述を以て滿るも尚失れ足らざるべきに、前後十五章に割きて是に盡て、餘に曾他の嘱目の贊辭に依りて補はめられ、而かも其說たる自己の體見に過ぎずして、有も別節の前途を望視し、後進を指導勝振せんとする熱誠の片鱗たりなきは遺憾と欠せざる得ず、今枝葉の論議を指摘勝振せんとする熱誠の片鱗たりなるものを見るに、唯々春蠶飼育にのみ題當して、夏秋蠶飼育に應用すべからざるは著者の自白する所なり、是たり該法は前世紀の遺物のみ、如何とせんれば今世紀に賞に夏秋蠶發展の時代に屬すれば、斯くて二十世紀の養蠶法の要領是にあるべ、更に文其内容を顧へば最近東我の煩雜なる蠶兒を上梓しむるに不便なる点れ幾何ぞ、而して著者は原り二種飼育と稱せず、然かれども是態て該法は蠶體飼育の虞爲なるべきを述べて檜飼法を稱せり、然かれども是態て該法は蠶體飼育の虞爲なるべきを述べて檜飼法を稱せり、然かれども是態て該法は蠶體飼育の虞爲なるべきを述べて檜飼法を稱せり、然かれども是態て該法は蠶體飼育の虞爲なるべきを述べて檜飼法を稱せり、

倫敦の金融風潮を報ずれども歐米の機業は猶不振の狀態に在りて、三月中に於ける横濱生糸市場は、依然沈靜の裡に送りたるが、月初八百六十五圓なりし信州上一番格は、漸次下落して八百五十圓となり、中旬に入りて春挽糸の順次出廻るに連れ、商談案外圓滑に運び、日に平均三百個内外の賣行きを示し、殊に地遣糸の好況を呈したるより、在荷日に減少したるも、下旬に及んで豫想の如く春挽糸の出廻り十分ならざると、新規法文の到達せざるとに依り、市場は閑散を極めたり、然れども全月中の手合高は五千三百五十七個半にして、之を昨年の同期に比すれば、同く四百八十個半の増加を示し管て四萬五千餘梱を算したる在荷は月末には二萬四千梱に減少するに至れり。

而して客月中に於て最も高價に賣行きたるは、山形縣清盛社太九百五十圓にして、最低價なりしは群馬縣甘樂社銀字鹿繊八百拾圓なりとす、今左に日本中の生糸集散種別表を掲げて參考となさん。

弱そるものありと雖も、尚增減の僅小なるを免れず、產額少にて飽まで勝利を得べきにあらず、到底品質を度外視し得ざるなり、然らば蠶品質の不良なる相銅法なるものは其根底に於て存立を許さざるにあらずや、唯々該法は蠶種製造上成績粗惡なるも貴兒飼育に於て且つ稍事な発るとこふにあるも、凡そ生物に遺傳の傾向なるも存する限り、強ひて劣惡なる蠶を以て飼育するは望むからず、斯の如きは成績惡美にして而かも蠶兒は強健に、且病毒を免るべき蠶種製造法を知らざるものの事にして、製種法の進歩せる今日に於て期るべきにあらず、且の勞力經濟の要に至りても養蠶に強事たるは多くは老幼婦女子にして、勞力を是に節約するも彼に利用するの便少し、換言すれば松蟲除沙に節するも睡眠著くば遊技に空費する事注々あり、要る睡眠遊技に節して美國に換ふるの優ずや、是に於て、が蠶兒相銅法に夏秋蠶の飼育に應用すべからずるは勿論、勞力の利用を誤り成績の品質を劣等ならしむる十九世紀的養蠶法なりと論ずる為ず、是故て專言な該に著者の見に任せて大方の教を待つ所以なり、文辭の疎なる失せるは誰に無下るの除に出づ、乞ふ深く尤みざらんことを。

最近十年間の絲價

信州太一番絲格品を標準として、最近十ヶ年間の最高最低の絲價を列挙すれば左の如しと。

	最高市價	最低絲價		最高市價	最低絲價
廿一年	九三〇	八二五	廿二年	一三一〇	八九五
廿三年	一二七〇	七六〇	廿四年	九五〇	七八〇
廿五年	一〇〇一五	九一〇	廿六年	一〇一七	九九五
廿七年	一〇〇一〇	八四五	廿八年	一〇七五	九一〇
廿九年	一三八五	九四〇	四十年	一四二〇	九三〇

生絲最高價月別前年對照表

明治四十一年		明治四十年	價格の差
一月	山梨縣矢島組金太	一、三一五	山形縣石黒館製絲 一、一一〇	二〇五
二月	山梨縣矢島組金太	一、三〇〇	山梨縣矢島組金太 一、〇四〇	二六〇
三月	岐阜縣金森製絲	一、四〇〇	山形縣清盛社太 九五〇	四五〇

尙左に生絲集散表を掲げて參考に資せん

明治四十一年三月自一日至三十一日生絲集散表

器械	持越	入荷	賣了	地方廻送	繰越
二三、四〇六	九、六六八	八、五六二	一、九一六	二二、五九六

尙左に生絲集散日別表を掲げて參考となさん。

明治四十一年三月自一日至三十一日生絲集散日別表

	入荷	手合	賣了	引渡	繰出	地方廻送	問屋名	社名	別種	最高價 最低價	諸説
一日											
二日	二四八	二六六	三六六	四六			三四 羽前清信常	盛館			日曜日
三日	一二七	五四	二二一	四〇	六二八	一一四	駿河紡信陽	盤館		八五〇〇	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
四日	一八二	六五	一一二	一七〇	四九五	三一	信濃秩父	樂社		八七〇〇	八七一五	商談依然寂相繼ぎて底々なるが如く下落を續けつゝあり
五日	二七三	九九四	二二一	三四	二一九	三一	信濃秩父	倉名		八五〇〇	九〇〇〇	前日注文の口へ少しく手合出來せしのみにて目に増の面白からざる成行なりし
六日	一五五	二二三	二七九	二七九	武蔵 上野	武蔵 上野	信濃 上下	明水 仁田	羽前	八七〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は總て變りなし
七日	二八五	三六六	二二一	三五三	六六	九七	上野	井澤	鰹	八五〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
八日	一一八	九九八	二二五	一一〇	一一〇	二二八	上野	鰹社	鰹	八五〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
九日	一七〇	二二一	二二五	二二一	二二八	二五	信濃 上野	砂糖	製	八五〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
十日	一三九	二七二	二五〇	二五一	二二八	九〇〇	信濃 秩父	砂糖	製	八五〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
十一日			二五五	二五一	二二八	七二	上野	砂糖	製	八五〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
十二日		四一七	一三〇	一三六	三六	四六	信濃	屋製	絹	八五〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
十三日		二五七	一二一	二〇〇	六九	五一	信濃	田切	絹	八五〇〇	八七一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
十四日		二二四	二二〇	二五	一三		信濃 岡谷	枚	製	八六〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
十五日							信濃	松	繭		八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
十六日		八四九	三二八	五七四	二田	上野	甲州	矢島	組	一一〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
十七日		三七二	三四八	五八三	武州	武州	甲州	矢島	組	三九〇	九〇一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
十八日		三一〇	二二七	四一	四三	二八	信濃	林	館	五一〇	八七一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
十九日		三三〇	四三四	三八	三四	四三七	信濃	田切	絹	八六〇〇	八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
二十日		四九六	五八五	三八	二八	一二三	信濃	枚	製	八六〇〇	八七一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十一日				三二七		一二三	岡谷		絹		八七一五	商談は前に底に捗々しくなり運賃品に貿易なるも四〇〇俵の出來せしも相場は變りなし
二十二日					二九三	六一	上野	田	組	一〇〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十三日		九九一	一九〇	七七九	一八		信濃	羽藤	組	一〇〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十四日		四七〇	九二	五九			上野	原	絹	八〇〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十五日							上野	鄰	社		八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十六日							上野	社	下		八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十七日				六二			信濃	武	館	九七〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十八日				二九三			甘田	藏	館	九七〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
二十九日							上野	社	館	九七〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
三十日							甘田	樂	館	九七〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
三十一日							上野	社	館	九七〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
三十二日							産	銀	字	八〇〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
三十三日							信濃	館	館	八〇〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり
三十四日							甘田	樂	社	九七〇	八八一五	當用日へ佛々商ひ出來せしが流役は慥に市場不振にて顧客減ぜざるに因り前より五圓安なり

座繰	撰区	繰糸	合計
七、五七五	二、〇五	一四四	三三、二三〇
三二六	一、〇四八	六六	一〇、六六〇
九、六七〇	二、〇九六	一三九	二、〇四四
一〇七	五	一	三、五七〇
六、七四五	二、〇九六	一三九	三、一、五七〇

備考

一、製中單位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、繰越以外に商談中のものありと知るべし

四、繰越以外に商談中のものありしに依る

五、賣了中未開に輸出せるものは四千五百六十七俵にして欧洲に輸出せるものは一千九百十二俵なりとす

尙左に生絲集散日別表を掲げて參考となさん。

御左に本年一月以來の生絲集散の狀況を明かならしめん爲に月表別を示すべし。

生絲集散前年照表對

年月	永持越	入荷	實了	繰越	繭糸	出荷
廿五日						
廿六日	三九四	一九二				
廿七日	五九九	四八三				
廿八日	二二三	四八四				
廿九日	三六六	三三五				
三十日		三五一				
廿一日	一一九二	五五五				
廿一日	四一五	一四二	四五	一八	二六二	丹波氷上郡二井馬岡
廿一日	二二五	三六	一一八一	五四	岩代炭鉱同金絲	
廿一日	九一			一九	信濃林業絲	
廿一日	四四四	四五	一〇六	信濃積出	伊那製絲	
廿一日	二二四四	三六	四四	相模湖	甲斐製絲	
廿一日	九	九	四九〇	八一	信濃城三松	東野作炭上
廿一日	六〇二	四九〇	三五	東京絲	上州製絲	山水製絲
廿一日	九六七〇	三七七	一一四一	一一四一	一一四一	一一四一
廿一日	二九五九	三〇九八七	二四二一八	二四二一八	二四二一八	二四二一八
廿一日	二〇二九二	二四二一八	二九九六	二三七四二一	二三四二一六六〇	二三四二一六六〇
四十年三月						

里昂市場

在里昂英國領事の報告に據れば、獨逸里昂市場に於ける生絲の商況は、昨今引續き沈靜なる由なれども、幸ひに一二小店を除きて之れ公然めに倒産を惹起したるものあるか如きも、而して生絲及び其製品共昨年九月迄は市況極めて活發に、絲價も

價格の低落を來たすに至り、殊に十一月に至り似相場の下落は上海及び廣東の爲替相場に影響を及ぼし、益絲强騰の結果は漸々下落するに至れり、而して此市況の不定なる爲め價格の低廉なるに拘はらず、買入も自然手控へ常用必要品の外に出でず、十月七日に五十八圓乃至五十九圓に及んでは四十八圓に別れたりし、尤も一番中に多く米國に需用せらるゝ故に比下落の傾向を生ずるに至りたるも、市場の狀況は大四月迄は大抵沈靜の狀態にて、米國不況の影響は大に米國の恐慌に連動し、過去數年間の一例を掲ぐれば、日本産一番二分の一器械絲九月七日には五十六圓乃至六十圓なりしもの、十月七日には五十八圓乃至五十九圓に下落し、而して此市況の不定なる爲め價格の低廉なるに拘はらず、買入も自然手控へ常用必要品の外に出でず、十月七日には五十八圓乃至五十九圓に下落し、尤も一番中に多く米國に需用せらるゝ故に比下落の傾向を生ずるに至りたるも、市場の狀況は大四月迄は大抵沈靜の狀態にて、米國不況の影響は大に米國の恐慌に連動し、過去數年間の一例を掲ぐれば、日本産一番二分の一器械絲九月七日には五十六圓乃至六十圓なりしもの

會務錄事

支會職員の囑託

本會島根支會長は同縣知事更迭に就き、今回本會會頭の推薦に依り、總裁殿下より、同委員部長中異動ありたるに付同支會長の推薦により會頭より左の通り夫々囑託せられたり。

島根支會長　若林　貴藏
同　委員長　飯石　三宅新太郎　鹿足　土肥　忠雄
仁多　藤田　幸年

大分支會幹事長欠員の處、今回　總裁殿下より左の通り御囑託あらせられたり。

大分支部幹事長　衛藤　一六

熊本支會玉名委員部長更迭に就き、同支會長の推薦により今回會頭より左の通り囑託あらせられたり。

熊本支會玉名委員部長　十時參吉郎

埼玉支會委員部長異動ありたるに就き、同支會長の推薦により今回會頭より左の通り囑託あらせられたり。

入間　市川春太郎　比企　水谷麻之助　秩父　佐野貞治郎
兒玉　白倉　通倫　大里　島崎廣太郎　北埼玉　東郷　重清
南埼玉　奥田桑之助　北葛飾　小林　嘉行

滋賀支會委員部長中異動ありたるに就き、今回同支會長の推薦により會頭より左の通り囑託せられたり。

滋賀　友田　榮三　野州　藤谷永三郎　愛知　今井　兼寛
坂田　澤　信治郎　高島　鵜飼　元吉
茨城支會長の推薦により、同支會商議員を今回會頭より左の通り囑託せられたり。

野本　治平　清宮　正唯　谷口彌惣次　小島　倉吉
中村熊次郎

今回下野支會長の推薦により、本會々頭より同支會商議員左の通り囑託せられたり。

齋藤乙次郎　宮田　桑治

今回岐阜支會長の推薦により、本會々頭より同支會委員部長、商議員を左の通り囑託せられたり。

羽島　大野　薫　海津　今村　兎毛　養老　澤村忠三郎
安八　後藤又次郎　桃斐　石田　安太　本巣　豐田幾次郎
山縣　内藤　兼雄　武儀　竹内伊之助　稻葉　齋藤　實直
加茂　石田　英諦　可兒　寺田　敕一　土岐　田中保太郎
惠那　若林　卓爾　益田　山内權次郎　大野　柿元　一兵
吉城　山下　三次　郡上　市原　章　不破　窪田　武洪
商議員　坪井　伊助

地方委員部職員の囑託

本會高知地方委員長島取地方委員長更迭に就き、會頭の推薦により　總裁殿下より左の通り囑託あらせられたり。

高知地方委員長　石原　健三
島取地方委員長　吉森　良

特別會員の推擧

左記の諸氏は本會の旨趣を贊成し會務に貢献せられ、其功勞顯著なるを以て　總裁殿下の台聞に達し今回特別會員に推擧せられたり。

茨城支會　柚山累太郎　松浦　昌　福田　晋
大分支會　中川　重雄　佐久間岡吉　柳瀬佐太郎
今村　貞吉　安藤　龜松　坂本　兵六
埼玉支會　茂木　安太　山田綱太郎　田中　幾吉
群馬支會　佐俣　多造　兎形兵五郎　小山　喜一
愛知支會　吉見治兵衛
靜岡支會　鈴木勝太郎　飯島善太郎
富山支會　永井金次郎
信濃支會　市川　平藏

功績調査委員會

去三月二日午後一時より本會事務所に於て功績調査委員會を開催したるに、今西直次郎、八田達也、加賀山長四郎、尾澤琢郎、辻鴨太郎の各委員及吉池理事出席、本邦蠶絲業に於ける功勞者及各支會長、地方委員部長より推擧せられたる製絲從業者二百數十名に就き慎重なる調査を遂げ、午後七時散會せり。

桑苗病蟲害取締に關する調査委員會

去三月三日午後一時より本會事務所に於て開會、出席者稼木喜三、林鼎作、八田達也、工藤善助、下田伊左衛門の各委員及吉池理事等にして、詳密なる調査を遂げたる末其決議は退て評議員會に提出することゝなり、午後八時散會したり。

生絲定期取引に關する調査委員會

去三月十日午後一時より横濱生絲檢査所に於て開會、出席者は東京より松平會頭、酒匂副會頭を始め本多書記の兩理事、加賀山評議員等にして、横濱側には柴藤理事、若尾、渡邊北村、伊藤の各委員等檢査所新築の廣間に於て開議し、中頃一同定期取引の實況を視察し、後再ひ審議を爲したるが當日委員なる尾澤、羽田の兩氏病氣の爲出席なきを以て、各自意見を陳ぶるに止り決定する所なくして午後五時散會せり。

吉池理事の茨城支會出張

茨城支會は近來漸くに發展の傾向を現はし、會員の數亦漸次多きを來たしたるが、去三月五日を以て同支會發會式を擧行せり、同支會より會頭其他本會役員の臨場を請ひ來りたるも、會頭は議會開會中の事とて吉池理事代理として出張せられ、農商務省よりは加賀山蠶絲課長臨場せられたり、

群馬支會蠶業講話會

群馬支會に於ては各郡に本會擴張を兼ね蠶業講話會を開設の爲め本會職員の出張を請求し來りたるを以て、本會は學藝委員なる東京蠶業講習所技師明石弘氏及同所技手横田長太郎

氏に囑託し、横田技手は二月二十一日より同二十七日まで明石技師は同二十七日より三月六日まで各部を巡回講話せられたり。

吉池理事の福島、滋賀兩支會出張

本會第三回總會開催に就き打合の爲め、去月三十一日開催地の福島支會へ出張し、本月二日歸京せられ、更に滋賀支會總集會へ會頭代理として臨席の爲め四月三日同地に向け出張し、序を以て京都に趣き故松永京都蠶業講習所長の葬儀に列し、同六日歸京せられたり。

宮城支會第四回高等蠶業講習會

同支會に於ては年々高等蠶業講習會を開催し來りたるが、本年は登米郡登米町に於て其第四回を開設するを以て本會は東京蠶業講習所技手坪井啓作氏に出張を囑託し、同氏は去十四日出發同地に赴かれたり。

埼玉支會玉絲製造其他講習會

埼玉支會に於ては本會蠶絲講習會規程に依り玉絲製造及屑物整理講習會を開設したるが、本會より教師として東京蠶業講習所卒業生高橋たか子を派遣し、去二月二十五日より十日間、北企郡松山町に於て講習を爲し、本月五日講習生山下り以外十七名に對し、會頭より修業證書を授與せられたり、尚引續き兒玉郡本庄町、同郡兒玉町の二ケ所に於て各三週間づつ講習を爲す都合なり。

富山支會總集會

富山支會第二回總會及び蠶業講習會は二月廿九日正午より富山市總曲輪武德會場に於て開會し、第一會にて一同着席第二會にて來賓祭席するや、渡邊幹事長は開會の辭を述べ、次に會長の報告を爲し、次に協議問題に移り協議する所あり、暫時休憩の後再び開會し、先づ川上會長の告辭あり、次に左記松平會員の告辭と、藤本會理事に依て代讀されたり。

告　辭

曩枝先づ總て桑芽正に春を街むの候に當り六日本蠶絲會富山支會第二回總會か開催して斯界の貴族が鳩む正重一冒の辭なくして可なりんや雖ふに本邦の蠶絲業は其由來頗る強く佳歳風に待つへきのありしも中道に して衰へ久しく落伍の感ありしか現知事の就任せらるゝや意を蠶と蠶絲業の發展に注き鼎精自ら奮矢を指して遂か實行に勢められたるを以て本邦の蠶業は漸に一新生面を拓かんとするの勢のあり而して本邦當局者及び會員諸子の熱心なる移し既に欣躍の情に堪へ難くさるの八尾蠶業巻校長の富報を始め諸士今又第二回總會の開催と動機として會員の堅慕に勞る斯業の改善發達を以て主義本領とせる本會の大發展大機に資し會員最大の支會たらしめんことを期せらる洵に慶賀の至に堪へさるなり今や不幸にして我生絲市場は沈論の秋に遭遇すと雖も原蚕の二境に比較的富なる蠶業にも弱は其之あり況んや時々刻々の經濟事情に支配せられつゝある生絲貿易や元來蠶業は農家の副業と雖も其の經營と雖とも其の事情に思慮ある當業者の踏すべきことあらさるなり頑く迎へ難の面かも本邦無の財源たるか故に順境に遇て之を經營し逆境に遇て之を廢止せんとするか如きは思慮ある當業者の踏すべきことあらさるなり頑く迎へ難の基礎に於て之を經營せさるへからす 殊に一新生面を拓かんとするの勢のあり而して當業者の苦衷察するに餘りあり不況に陥り所界に於ける大打擊に対する當業者の苦衷察するに餘りあり不況に陥り所界に於ける大打擊に対する共に絲價の恢復を見るは算せして嘆かなれ鎖境に趣て動かす鼠に後圖の策を立つべきなり者と雖も欧米經界の風調に鑑すると

時報

貳等賞　田部アキノ　笠川郡立養蚕試驗所　前島芳造
安達　安　田中長太郎　大中榮政　田中藤助

生絲之部

壹等賞　生絲　高津製絲株式會社　光野猛治
貳等賞　吉野製糸株式會社　櫻井製絲場
大成社製絲場　青井登市

繭種之部

壹等賞　蚕種　大森貞治
貳等賞　原蚕種　宮坂留吉
惠盛次郎　加藤豊七　高橋源七
若林周次郎
田中信太郎

茨城支會發會式の景況

大日本蠶絲會茨城支會發會式は三月五日午後一時より水戸市第二公園内弘道館演武場に於て挙行せられたり、此日當々として前日来より降り續けたる春雨未た霽れず風さへ加り、可惜本日の發會式も如何あらんと氣支へたりしが、午前十時頃ふと雨止み、風弗たれ、正午頃に漸り晴天となりたれば前内外の装飾一と際目立て見へたり、弘道館の門前に設けたる絲門には紅白に其て歓迎の文字を鍵付け夫間として當日の盛會なく鄭くが如く、間中整百の極樹にやや正に三月の笑を含み芳香四囲として尚然本日の来集を偽りものに似たり、會場内にも同じく笑声ふ時に緑家も亦海の開花菖蒲の賑るいあり、右側には繭絲の出品を陳列し、左側は新製上等絲を陳列したる等級の外骨柔の現線々窓けり、雖て定刻なる二時四十分に至り發會式に報せられ、第一鈴を以て會員一同恍惚敬大なる事由なく為すに覆ふべからざる所なり然るに頃来米國經濟界の暗雲漸々迫胎破光を認めんとする色々来して然らば蠶絲業の如き最も甚だ強き影響を受けんとは如何あらんと思へば、此日當々として前日来より降り續けたる春雨未た霽れず風さへ加り、可惜本日の發會式も如何あらんと氣支へたりしが、午前十時頃ふと雨止み、風弗たれ、弘道館の門前に設けたる絲門には紅白に其て歓迎の文字を鍵付け夫間として當日の盛會なく鄭くが如く、門を入れば百有余坪の庭内より高く三方に引き廻されたる各種の盛樹にやや正に三月の笑を含み芳香四囲として尚然本日の来集を偽りものに似たり、會場内にも同じく笑声ふ時に緑家も亦海の開花菖蒲の賑るいあり、右側には繭絲の出品を陳列し、左側は新製上等絲を陳列したる等級の外骨柔の現線々窓けり、雖て定刻なる二時四十分に至り發會式に報せられ、第一鈴を以て會員一同恍惚敬大なる事由なく為すに覆ふべからざる所なり然るに頃来米國經濟界の暗雲漸々迫胎破光を認めんとする色々来して然らば蠶絲業の如き最も甚だ強き影響を受けんとは如何あらんと思へば、此日當々として前日来より降り續けたる春雨未た霽れず風さへ加り、可惜本日の發會式も如何あらんと氣支へたりしが、午前十時頃ふと雨止み、風弗たれ、弘道館の門前に設けたる絲門には紅白に其て歓迎の文字を鍵付け夫間として當日の盛會なく鄭くが如く、門を入れば百有余坪の庭内より高く三方に引き廻されたる各種の盛樹にやや正に三月の笑を含み芳香四囲として尚然本日の来集を偽りものに似たり、會場内にも同じく笑声ふ時に緑家も亦海の開花菖蒲の賑るいあり、右側には繭絲の出品を陳列し、左側は新製上等絲を陳列したる等級の外骨柔の現線々窓けり、雖て定刻なる二時四十分に至り發會式に報せられ、第一鈴を以て會員一同

第二鈴後第一、第三鈴後第四番大臣代理加賀山義商務技師及び大日本蠶絲會長松平第代理吉田大日本蠶絲會理事第一、絶教經濟教百名、第二鈴に二番茨城支會長代理式喪送みず都外副議し、其て松平蠶絲會々頭の挨拶、松岡義商務大臣の祝辭會員総代の答辞の順に於て攻吉酒井の謹聴あり、紅組數十名の謹聞為鈴蓋し、午後五時全く退散を告げたり、其式辞次に告辞説明答辞等左の如し。

式辞

大日本蠶絲茨城支會組織成り技に本日を以て発し、翌日蠶絲業の発展の式を挙ぐ、抑も蠶絲業の発展は我国産業の根源たる事に属し、国家経済上最も重大なる事柄なり而して陛下聖恵の賜物にして、我国産業の発展は、我国産業は上級国民の地に発達急にして常態の蠶業は世に忘却せられんとせり然るに戦争に乗じ、我国産業は

年の割比を記すれば左の如し。

	繭百戸数	指立枚数	枚繭高
春蠶 四十年	一〇六九七七	一八四四一一	一三一八六〇七
夏蠶 四十年	一〇七六一六	一八一一三一	一三一八九九
秋蠶 四十年	一〇七七一〇	一〇〇四四五	一三一四九八
合計 四十年	一〇七七一〇	一〇〇四四五	一三一四九八

（備考）繭百戸数春夏秋蠶共清せる故合計せず合計の下の價格は三種を平均せるものなり

次に四十年中全國各府縣に於ける春夏秋蠶の收繭高を擧ぐれば左の如し。

春蠶收繭

東京	六一七三八	四五四一〇	一三四一三四	一〇七六一一	一一八一九九
京都	四九一一九	一三四一三四	一〇七六一一	一一八一九九	一一八一九九
大阪	一三四一三四	一〇七六一一	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
神奈川	五三七四四	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
兵庫	二一二三八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長崎	五七七三八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
新潟	一九三三八七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
埼玉	一九四一三八七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
群馬	二八一七六二	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
茨城	二八八七五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
栃木	四五六八三五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
千葉	一一九九一八五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
山梨	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
静岡	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
愛知	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
三重	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
奈良	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
和歌山	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
滋賀	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岐阜	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
福島	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
宮城	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岩手	四五〇三八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九

秋蠶收繭

東京	九七一一一	二三五五五	八五九一四	一一八一九九	一一八一九九
京都	九五四一九	六五二二八	八一六五七	一一八一九九	一一八一九九
大阪	一一五三一四	二一八三九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
神奈川	七七一三四	一一五三二九	七七一九八七	一一八一九九	一一八一九九
兵庫	七一五三四	六四二八六	六四二八六	一一八一九九	一一八一九九
長崎	七四四〇八	七四四〇八	七四四〇八	一一八一九九	一一八一九九
新潟	二八八三五	一一五三四七三	一一五三四七三	一一八一九九	一一八一九九
埼玉	五四一〇〇一	五四一〇〇一	七一一四〇〇	一一八一九九	一一八一九九
群馬	四四五八八	三四一九三四	八七九四七三	一一八一九九	一一八一九九
茨城	二八九六三五	一一八一八一四	一一〇一一八一	一一八一九九	一一八一九九
栃木	二八八七九五	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
千葉	一一四五八五	五三九五九五	五三九五九五	一一八一九九	一一八一九九
山梨	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
静岡	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
愛知	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
三重	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
奈良	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
和歌山	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
滋賀	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
岐阜	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
福島	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
宮城	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一八一九九	一一六〇三五	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九
岩手	四五〇三八	四五〇三八	四五〇三八	一一八一九九	一一八一九九

東京	二三二五五五	八五九一四	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
京都	六五二二八	六一六五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
大阪	一一五三一四	二一八三九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
神奈川	七七一三四	七七一九八七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
兵庫	七一五三四	六四二八六	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長崎	七四四〇八	七四四〇八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
新潟	二五三四七三	二五三四七三	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
埼玉	七一一四〇〇	七一一四〇〇	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
群馬	八七九四七三	三四一九三四	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
茨城	一一八一八一四	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
栃木	一一六〇三五	五七七六三三	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
千葉	一一六〇三五	五七七六三三	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
山梨	一一六〇三五	六四二〇五四	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
静岡	一一六〇三五	一一三七三八八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
愛知	一一六〇三五	四九七〇四三	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
三重	一一六〇三五	一一七三一七四	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
奈良	一一六〇三五	一一八八一九四	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
和歌山	一一六〇三五	一一四〇八八〇	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
滋賀	一一六〇三五	五六八〇八〇	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岐阜	一一六〇三五	九七七〇	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
福島	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
宮城	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一六〇三五	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岩手	四五〇三八	四五〇三八	四五〇三八	一一八一九九	一一八一九九

東京	一一〇六九七七	一八四四一一	一三一八六〇七	一一八一九九	一一八一九九
京都	一一〇六九七七	一八四四一一	一三一八九九	一一八一九九	一一八一九九
大阪	一一〇七六一六	一一四三一一	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
神奈川	一一八一二九	一〇〇四四五	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
兵庫	一一八一二九	九一〇〇四四五	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
長崎	一一八一二九	四三四六六五	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
新潟	一一八一二九	五三四六六五	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
埼玉	一一八一二九	六三四六六五	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
群馬	一一八一二九	三四一九三四	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
茨城	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
栃木	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
千葉	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
山梨	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
静岡	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
愛知	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
三重	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
奈良	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
和歌山	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
滋賀	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
岐阜	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
福島	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
宮城	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
長野	一一八一二九	四三五九九八	一三一四九八	一一八一九九	一一八一九九
岩手	四五〇三八	四五〇三八	四五〇三八	一一八一九九	一一八一九九

▲蠶繭種掃立豫想枚數　昨年の蠶種製造高かぶりしより、本年の蠶種掃立豫想枚數は實に二百六十九萬八千五百八十七枚にして之を昨年の掃立枚數に比すれば二十五萬四千三百二十六枚を增し、約一割五分強の增加あるも、之を各府縣の掃立豫想枚數を列擧すれば左の如し。

府縣名	豫想枚數	府縣名	豫想枚數
東京	七〇、六五四	青森	六二二七
京都	五四、三二六	秋田	二、三四三五一
大阪	一、七九五	山形	五、八六一一
神奈川	五四、三二六	石川	五六、五九六
兵庫	三〇三四五九、四	富山	三、六、六、八
長崎	一一、七六、八	鳥取	三三四九四一、六
新潟	三三五七一二〇	島根	三六四七一七七
埼玉	二九九五九五、九	岡山	二、三、六、八
群馬	二九九五九五、九	廣島	二、三、六、八
茨城	三〇三四五九、四	山口	二、三、六、八
栃木	二九九五九五、九	和歌山	二、三、六、八
千葉	二九九五九五、九	徳島	二、三、六、八
山梨	二九九五九五、九	香川	二、三、六、八
静岡	二九九五九五、九	愛媛	二、三、六、八
愛知	二九九五九五、九	高知	二、三、六、八
三重	二九九五九五、九	福岡	二、三、六、八
奈良	二九九五九五、九	佐賀	二、三、六、八
和歌山	二九九五九五、九	大分	二、三、六、八
滋賀	二九九五九五、九	熊本	二、三、六、八
岐阜	二九九五九五、九	宮崎	二、三、六、八
長野	二九九五九五、九	鹿児島	二、三、六、八
福島	二九九五九五、九	沖縄	二、三、六、八
宮城	二九九五九五、九	北海道	二、三、六、八
長野	二九九五九五、九	合計	二、二四、一、五、九、五、五
岩手	三〇三四五九、四		

▲蠶種掃立豫想枚數　昨年の蠶種製造高かぶりしより、本年の掃立豫想枚數は實に二百六十九萬八千五百八十七枚にして之を昨年の掃立枚數に比すれば二十五萬四千三百二十六枚を增し、約一割五分強の增加あるも、之を各府縣の掃立豫想枚數を列擧すれば左の如し。

府縣名	豫想枚數	府縣名	豫想枚數
東京	七〇、六五四	青森	六二二七
京都	五四、三二六	秋田	二、三四三五一
大阪	一、七九五	山形	五、八六一一
神奈川	五四、三二六	石川	五六、五九六
兵庫	三〇三四五九、四	富山	三、六、六、八
長崎	一一、七六、八	鳥取	三三四九四一、六
新潟	三三五七一二〇	島根	三六四七一七七
埼玉	二九九五九五、九	岡山	二、三、六、八
群馬	二九九五九五、九	廣島	二、三、六、八
茨城	三〇三四五九、四	山口	二、三、六、八
栃木	二九九五九五、九	和歌山	二、三、六、八
千葉	二九九五九五、九	徳島	二、三、六、八
山梨	二九九五九五、九	香川	二、三、六、八
静岡	二九九五九五、九	愛媛	二、三、六、八
愛知	二九九五九五、九	高知	二、三、六、八
三重	二九九五九五、九	福岡	二、三、六、八
奈良	二九九五九五、九	佐賀	二、三、六、八
和歌山	二九九五九五、九	大分	二、三、六、八
滋賀	二九九五九五、九	熊本	二、三、六、八
岐阜	二九九五九五、九	宮崎	二、三、六、八
長野	二九九五九五、九	鹿児島	二、三、六、八
福島	二九九五九五、九	沖縄	二、三、六、八
宮城	二九九五九五、九	北海道	二、三、六、八
長野	二九九五九五、九	合計	二、二四、一、五、九、五、五
岩手	三〇三四五九、四		

埼玉	二一一、三〇六	二〇〇、五一九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
群馬	二八三五五二	六五七二	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
千葉	六四二二五七	八、八七八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
茨城	八七、九三四	二一、七〇八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
栃木	三一五九〇	三一五九〇	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
奈良	七、三〇九	七、三〇九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
三重	四二、八六一	四二、八六一	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
愛知	一七、〇三九	一七、〇三九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
静岡	一一、四三六	一一、四三六	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
山梨	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
滋賀	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岐阜	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
福島	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
宮城	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岩手	四五〇三八	四五〇三八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九

埼玉	二〇、五一九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
群馬	二八三五五二	六五七二	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
千葉	八、八七八	二一、七〇八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
茨城	三一、五九〇	三一、五九〇	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
栃木	七、三〇九	七、三〇九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
奈良	四二、八六一	四二、八六一	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
三重	一七、〇三九	一七、〇三九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
愛知	四六、〇二九	四六、〇二九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
静岡	一一、四三六	一一、四三六	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
山梨	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
滋賀	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岐阜	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
福島	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
宮城	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岩手	四五〇三八	四五〇三八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九

埼玉	二〇、五一九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
群馬	二八三五五二	六五七二	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
千葉	八、八七八	二一、七〇八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
茨城	三一、五九〇	三一、五九〇	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
栃木	七、三〇九	七、三〇九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
奈良	四二、八六一	四二、八六一	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
三重	一七、〇三九	一七、〇三九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
愛知	四六、〇二九	四六、〇二九	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
静岡	一一、四三六	一一、四三六	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
山梨	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
滋賀	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岐阜	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
福島	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
宮城	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
長野	二八三五五二	六四二二五七	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九
岩手	四五〇三八	四五〇三八	一一八一九九	一一八一九九	一一八一九九

▲總督府の天蠶調査　農商務省は總督府に蠶業地方の天蠶を調査し其結果に依て二種の報告を得たり。一昨年我國の特與せし人士に其の調査を嘱託したり。

▲南滿柞蠶と露國　三四年來柞蠶絲が歐米の織物商に愛せられ一代の流行を作り、年々價格引上げつゝあるが、露國にて高加索地方に產出する粗蠶絲の外多くは上海に仰げるが、滿洲柞蠶絲の輸入も里昂商に受てより、月々の輸入額は恐らく登越なる來たり、元來同地の柞蠶絲は柞蠶綿の安東縣製平より買取りたる原料の關係商が同地に於て製絲し、之を上海に送致し、彼等の手に落て歐に里昂より輸入する所なりしが、一般露國の織物商及染絲の者は、此等の特與せし人士に、一昨年我國の柞蠶會社の特與せし人士に、其結果は、まだ露國製品に著眼せず者も少かゝりしも、漸次其價の上昇に伴ひ、然るに從來山東省絲綿の清國の滿蔵絲に比て相場三萬餘元為替に思り直に是を露國東四比利亞廻線道に托送し炎熱秤商人に買込られたが、之等に相場作品の露國直接取引の第一番手なり、露國に於ては絹そのものよりは柞蠶絲が從來實にして、其識者方法に倣て發見せられざれども、之を始めて普通絹絲と共に織りその先鞭利用して紋形織等を作るの外、婦人向の裏地には、特來益々發展の餘地あり、將來製露貿易に極要の地歩を占るに至るべしといふ。

▲桑園の增加　農商務省の統計によれば我國の桑園は最近著しき增加を示し、去三年中、於ては反別合計二百三萬九反なりしもの、三十九年には三十六萬四千七百十七町七反となりたるが、之を各府縣に就て見たに、例年に於ては特作地の有利なるため、煙草畑に作り替へられたるも、熊本は特作地整理のため多少減少したるも、他は一般に增加したり、就中鹿兒島岐阜島根等は蠶業發達のため、宮城福島秋田宮崎等は桑園開拓者に對し補助費を支出し植栽を奬勵せしため、共に著しく增加したり、而して三十年より同廿九年に至る八ヶ年間に於ける累計比較左の如し。

三〇四三一二七	廿三年	廿三年	廿三年	廿三年	廿三年
二九九四三一八	廿四年	廿四年	廿四年	廿四年	廿四年
三一六一六八	廿五年	廿五年	廿五年	廿五年	廿五年
三二四九四一六	廿六年	廿六年	廿六年	廿六年	廿六年
三六四七一七七	廿七年	廿七年	廿七年	廿七年	廿七年
三三五七一二〇	廿八年	廿八年	廿八年	廿八年	廿八年

▲折返絲一部賣止　折返絲は昨年特に實行好況なりし結果、國策者の打擊の程度は他の製絲業者の知て深甚ならざるに、四月市中現在高は比較的少數にして今後新絲逐の出廻り高も三千九年の入荷高は約九千餘個なりしに、四十年度に於ては今日迄に既に約一萬一千個迄に達し、新絲後は尚二ヶ月間せる今日前年度より、既に約二千個近く入荷せることなれば、如何に四十年度の產額前年度に勝るか推知べきなり、此數字の上より見て今後の入荷高は推して知るべきなり、市場の人氣は他品の製合に就ては、目下の相場は一頭馬八百三十四頭五拾以上のものは市中在品殆と數ふるに足らざるの數なるに、地方持寄筋も安値を見て買ひ控の傾向に見られるなり、目下當市場の風潮は金紙逸の上等品は百円ヲ割らずの間に、當分實止の方針を採るに至れるものゝ如くなりといふ。

▲西多摩郡の模範桑園

秋蠶飼育の漸く盛なるに徳ひ、桑葉の需要激増を来し、肥料の如きも仲びるの結果は、桑園の栽培に其發育佳良にして収穫良好なるべきものなれども、今其桑園に付き同郡生野村峰沢作氏の秋蠶用桑園の調査報告に係れる点より見れば、桑園の栽培に有益なる点は、地上に出でて枝葉を繁茂し、地上凡そ三尺の所に剪枝を作り、(同地方桑園仕立方の大部は種々の関係より地上二、三尺の高さに枝條の剪枝を為す)之を始め春蠶及び秋蠶に併用せしめ、数年前よりは秋蠶専用となし、収穫後の枝條は堅牢の故に薪炭の資料に供し、又は肥料として用ひ、其の新芽は翌年の春蠶用となし

野に眠る大師の線香の助　信濃　上下
春駒やはつ子の踊り子　盛岡　上田
今日の月見て見ては見ては　武蔵　伊藤
長閑やてはつ子の花の影　信濃　上田
海の面の大空の雲の影　信濃　上田
足元の花の影　信濃　上田
見てはつ子の花の影　信濃　上田
見ては見ては見ては見ては　信濃　上田
見ては見ては見ては見ては　信濃　上田
見ては見ては見ては見ては

五彩

あれさ御覽よ此の夕立に　甲斐　松柏
蟻も乘り出す木の葉船　羽前　東泉
寢る目寢ないで育てた蠶　羽前　東扇
金が敵で殺すのか　長野　花扇
花も眼が御鳥居きわに　咲いた椿の大神樂　羽前　枯葉
お蠶の看護婦姿の務め　背中に襟の赤十字　三河　錫亭かひこ
花の姿に霞の帶をしめて　笑顏の春の山　備後　天外

人

たゝむ羽織がまばらに匂ふ　花の里に濡れたやら　周防　愛蠶女
霞む山邊は桑畑つゞき　續く山家はみな蠶飼　岐阜　三舍

天

桑も摘みましよ菁葉の里に　絲もひきましよ主とならん　鬼川

選者吟

人に知られて幾夜の涙　ほろりとぽして落椿

○呪も涼しや村での自慢

一と口噺披露（第四回）

乙女絲ひく菁葉蔭

悪賞

甲「入る時いらない入らない時いるものがあるよ」○乙「そんなものがあるか何だ」○甲「黑呂の蓋」　上毛　順信

甲「一體ゆかりとは何のことだらう」○乙「あれは英語で洋館と云ふことさ」　群馬　寸馬

靖士「すイく一武勇で支度してばいかんぞ」○田舍者「へイ支度は致しません菊蛙」　三重　郡登子

甲「あすは月と日と重ぶ日だね」○乙「なぜ」甲「でも明日と云ふではないか」　羽前　李明

子供「お父さん蠶飼會報狂句出したいから教へてくださいな」○父「それはお爺さんに聞きなさ」○子供「なぜそれを」○父「つても錢（呼番）問題とあるから」　武蔵　川筋

子供「お父さん漱石の仁王經は坊ちゃん賣えだね」○父「なぜさ」○子供「何ぶつても體だもの」　岩代　鬼笑

母「坊や百人一首の子は誰飯たべて大きくなるのよ」○子供「道理で家の馬も夢なたべてから大きいのね」　越後　小川

子供「お父さん人の名を呼びすてしやうな」○父「馬鹿な云へ人間は皆てないよ」○子供「でも四郎や內閣と云ふもやありませんか」　常陸　鬼外

馬僧「お前は何が好きだ」○子供「なあに夜だからかまはせんよ」　常陸　鬼外

父「今頃蠶外が來たが教はが何のだらう」○子供「あれは新聞のですよ」　常陸　鬼外

人賞（十七頁）地賞（十七頁）天賞（二十三頁）に在り

讀者文藝懸賞募集

俳句

（原稿メ切毎月三十日。選者沒書）

△佛國巴里の建築業者に五萬の矢蔵者を出したりとロイタルの電報に見えたり其何の故たるか知らさるも近時工業界の一大事也對岸の火災既に御用。

△萬一大邪　洋上艦隊決戰ふ場合ならば商船は全く破壞せらるべしと米操者エヴァンス將軍御說如何にも敵眼請ふ自國民除に加州國民之が救濟か爲せ。

△南東の對　日ガイコット到底物にならさるべきも敵我兩者の感情之に後て益疎隔し他日の親睦を遠さば日清の不利風る大逆に排除せ慶東一面の暗雲。

△北鮮に　て明識內外の嘲望高かりし　有栖川宮殿下御健病に逝に他界の人とならせ給ふ之れ實に我帝國の一大不幸なり眞悔の情誰か禁ん嗚呼。

△蠶界の大　息人として新界萬人の崇敬止まさりし京都蠶業講習所長松永伍作氏去一日逝去遺族の客ならん事面識々奚天是無情萬悲の恨深か如何せん。

△東京蠶業　講習所女子部生徒基定員十名に對し志願者三十六名あり皆是地方名家の令嬢なりとか中には高等女學校卒業生もありとの事風良き現象。

△紐育ダイ　ヤモンドエンドジルグコンパニーなる生絲商被綸せりと傳ふ來國際商界の恐慌が生絲業界に及しても痛掻亦皆無ならさりしと見と遺憾千秋。

△江蘇浙江　の天蠶設に桑蠶を調査すべく去月十九日出發清せられたる帝國大學教授佐々木理學博士より其調査報告の新界に與ふる利益や頗る大ならん。

△長野縣下　に於ける四十一年度蚕種用蠶生產見込高合計百六十三萬五千九百二十三枚にして昨年度の產額に比すれば約九十萬枚の減加也と感なる徴。

△一昨三十　九年四月五十日の大雨害に我蠶界に悲慘の先兆を呈せしむ本年の天候果して如何去九日皆都の大降雨は九十年來の珍象天會是感謝有御用心。

△盥馬の警　察官勞働者と消火に奮闘し惨劇を演じ大同盟工體で起らんとする形勢也と水邸中學生徒の暴行既年弥一種の流行病物騒なる徴候。

△蠶界の大　問題にして久しく未解決の國蠶と多年研究の結果芳原加明磯息殺後の斷案を下すべしと大森博士萬史の氣宿眠れる新界を爲に活氣を添へん。

注意

狂句（俳句）は原稿紙一枚に付き五句限り入選者は一人に付三句限り◎題は必ず郵便はがきに限り◎葉書は必ず表面に會員外と記し住地の郡市村番地姓名雅號共明記し大日本蠶絲會文藝係宛にて送ること

懸賞

▲選者　花の本花爺宗匠
▲課題　立夏。牡丹。郭公。新葉。扇
▲懸賞　天分（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

狂句（川柳）

（原稿メ切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生
▲課題　蠶絲業に關係あるのならば何にてもよし
▲懸賞　天分（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

俚謠（都々逸）

（原稿メ切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生
▲課題　蠶絲業に關係するもの（但し專業なるものは沒書とす）
▲懸賞　天分（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

一と口噺

（原稿メ切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生
▲課題　何にてもよし（但し專業なるものは沒書とす）
▲懸賞　天分（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

蠶海涓滴

△佛國巴里の建築業者に五萬の矢蔵者を出したりとロイタルの電報に見えたり其何の故たるか知らさるも近時工業界の一大事也對岸の火災既に御用。

△萬一大邪　洋上艦隊決戰ふ場合ならば商船は全く破壞せらるべしと米操者エヴァンス將軍御說如何にも敵眼請ふ自國民除に加州國民之が救濟か爲せ。

△南東の對　日ガイコット到底物にならさるべきも敵我兩者の感情之に後て益疎隔し他日の親睦を遠さば日清の不利風る大逆に排除せ慶東一面の暗雲。

△北鮮に　て明識內外の嘲望高かりし　有栖川宮殿下御健病に逝に他界の人とならせ給ふ之れ實に我帝國の一大不幸なり眞悔の情誰か禁ん嗚呼。

△蠶界の大　息人として新界萬人の崇敬止まさりし京都蠶業講習所長松永伍作氏去一日逝去遺族の客ならん事面識々奚天是無情萬悲の恨深か如何せん。

△東京蠶業　講習所女子部生徒基定員十名に對し志願者三十六名あり皆是地方名家の令嬢なりとか中には高等女學校卒業生もありとの事風良き現象。

△紐育ダイ　ヤモンドエンドジルグコンパニーなる生絲商被綸せりと傳ふ來國際商界の恐慌が生絲業界に及しても痛掻亦皆無ならさりしと見と遺憾千秋。

△江蘇浙江　の天蠶設に桑蠶を調査すべく去月十九日出發清せられたる帝國大學教授佐々木理學博士より其調査報告の新界に與ふる利益や頗る大ならん。

△長野縣下　に於ける四十一年度蚕種用蠶生產見込高合計百六十三萬五千九百二十三枚にして昨年度の產額に比すれば約九十萬枚の減加也と感なる徴。

△一昨三十　九年四月五十日の大雨害に我蠶界に悲慘の先兆を呈せしむ本年の天候果して如何去九日皆都の大降雨は九十年來の珍象天會是感謝有御用心。

△盥馬の警　察官勞働者と消火に奮闘し惨劇を演じ大同盟工體で起らんとする形勢也と水邸中學生徒の暴行既年弥一種の流行病物騒なる徴候。

△蠶界の大　問題にして久しく未解決の國蠶と多年研究の結果芳原加明磯息殺後の斷案を下すべしと大森博士萬史の氣宿眠れる新界を爲に活氣を添へん。

寄贈書目

農商務省	農務局	第六五二一
月報		第一三六一七號
三田商業界		第四ノ二一三號
興農雜誌		第一ノ一〇一一號
大日本山林會報		第三〇三一四號
農業教育		第八〇一四號
斯民		第二一三號
工業化學雜誌		第二一二〇一號
學士會月報		第二四〇一號
大日本農會報		第二三〇一號
大日本水産會報		第二九七一八號
農業世界		第三ノ二一三號
農事雜報		第二八一九號
北越之蠶業		第六八一九號
大農園		第二二一二號
京都府農會報		第二八七一八號
埼玉農報		第三五一六號
新潟縣農會報		第五〇一一號
蠶業新報		第一七九一一八〇號
岐阜縣農會報		第二〇ノ二一三號
福井縣農會報		第二八一九號
鳥根縣農會報		第二八一五號
園藝月報		第六ノ五一六號
農會報		第二一三號
動物學雜誌		第二二二一三號
蠶業試驗場報		第一〇九一一號
何鹿蠶業會報		第一〇九一一號
兵庫縣蠶業會報		第八四一五號
朱絲日報		二月分—三月分

農商務省	通商局	第三四一五號
横濱商業會議所		第三三三一四號
三田商業研究會		第一四五一五號
興農園		第一四五一四七號
大日本山林會		第一七一八號
農業教育研究會		第二六一七號
鮑		第五〇一一號
工業化學會		第五四一五號
學士會		第五二一三號
大日本農會		第一九一一〇號
大日本私立衛生會		第三ノ二一三號
博文館		第二八一九號
新潟支會		第六六一七號
常國農家一致協會		第一〇六一七號
京都府農會		第二一一二號
埼玉農報社		第二一一三號
新潟縣農會報		第五一六號
蠶業新報社		第一四一五號
岐阜縣農會		第二ノ二一三號
鳥根縣農會		第二ノ二一三號
東京省務農組合事務所		第六〇一一號
常國農家一致協會		第一八號
東京蠶業講習所		三十九年度
東京蠶業講習所		第三七號
東京蠶業講習所		第一七號
島根縣		第六〇一一號
岐阜縣		神田新報
佐賀縣內務部		農商務省農務局報告 第七號
農商務省農務局		臨時增刊
東京蠶業講習所		
東京蠶業講習所		
城丹蠶友會		
長野縣		
臨時農業會議所編纂會		
臨時農業會議所編纂會		
農商務省農務局		
第十回京橋區實業大會報告		
百瀬軍次郎		
農商務省農務局		
愛蠶時報		
日本蠶友會		
蠶業新報		
何鹿蠶業會報		
兵庫縣蠶業會		
蠶業新報		
岩手縣農會		
東京正論社		
神田新報社		
農商務省農務局		
日本私立衛生會		

外務省通商局		第三四一五號
統計集誌		第三三三一四號
山梨縣蠶業品評會報		第一四五一五號
愛國婦人會		第一四五一四七號
興農園		第一七一八號
大日本山林會		第二六一七號
農業教育研究會		第五〇一一號
鮑		第五四一五號
工業化學會		第五二一三號
學士會		第一九一一〇號
大日本農會		第三ノ二一三號
農業組合		第二八一九號
博文館		第六五一六號
京阪實業新報		第六六一七號
福岡縣農會報		第一〇六一七號
盛岡農藝會報		第一一二號
秋田蠶業月報社		第二一一三號
千葉縣蠶絲時報		第一五一六號
青森公論		第一四一五號
農業界		第二ノ二一三號
福岡中央農會報		第二ノ二一三號
農業圖		第六〇一一號
東京正論		第一八號
蠶絲病理學研究會		第三七號
蠶絲病理學研究會		第六〇一一號
神田新報		第一七號
農商務省農務局報告		第七號
臨時增刊		

商況社		第四一五號
關西蠶業社		第三四一五號
東京統計協會		第三三三一四號
蠶友會		第一四五一五號
愛國婦人會		第一四五一四七號
興農園		第一七一八號
大日本山林會		第二六一七號
農業教育研究會		第五〇一一號
鮑		第五四一五號
工業化學會		第五二一三號
學士會		第一九一一〇號
大日本農會		第三ノ二一三號
農業組合		第二八一九號
博文館		第六五一六號
京阪實業新報		第六六一七號
福岡縣農會		第一〇六一七號
盛岡農藝會		第一一二號
秋田蠶業月報社		第二一一三號
千葉縣蠶絲時報社		第一五一六號
農業界		第二ノ二一三號
韓國中央農會		第二ノ二一三號
大日本農藝奬勵會		第六〇一一號
岩手縣農會		第三七號
東京正論社		第一八號
神田新報社		第一七號
農商務省農務局		
大日本私立衛生會		

農商務省	農務局	第三十三次農商務統計表
農商務省商工局		第一三次農商務統計表
農時報告桑樹調査試驗成績		
同	根草中毒試驗成績	
蠶事報告		第三十三號
蠶絲病防事務成績		
蠶絲病防事務成績		
蠶絲病防事務成績		
自明治四十三年	至明治四十年六月	蠶絲病防事務成績
蠶事報告		第三十二號
城丹蠶友會報		第四號
蠶絲病防事務成績		
蠶絲病防事務成績		
財政ニ關スル意見書		
產業組合好例		
第十回京橋區實業大會報告		
信濃民報		
蠶絲病防成績		
財政ニ關スル意見書		
臨時農業會議所編纂會		
臨時農業會議所編纂會		
農商務省農務局		
第十回京橋區實業大會		
百瀬軍次郎		
農商務省農務局		
愛蠶時報		
日本蠶友會		
蠶業新報		
何鹿蠶業會報		
兵庫縣蠶業會		
蠶業新報		
岩手縣農會		
東京正論社		
神田新報社		
農商務省農務局		
日本私立衛生會		

博文館		
農商務省農務局		
農商務省農務局		
農商務省商工局		
東京蠶業講習所		
東京蠶業講習所		
東京蠶業講習所		
島根縣		
岐阜縣		
佐賀縣內務部		
農商務省農務局		
東京蠶業講習所		
城丹蠶友會		
長野縣		
臨時農業會議所編纂會		
臨時農業會議所編纂會		
農商務省農務局		
第十回京橋區實業大會報		
百瀬軍次郎		
農商務省農務局		
愛蠶時報		
日本蠶友會		
蠶業新報		
何鹿蠶業會報		
兵庫縣蠶業會		
蠶業新報		
岩手縣農會		
東京正論社		
神田新報社		
農商務省農務局		
日本私立衛生會		

新刊紹介

蠶體病理學 全

著者 岩田平介著

養蠶に如何にして食物に侵るかの問は其一言にして答へうるのである、曰く病蠶を出さざること即ち是れ、トコロで答を蠶業者は此點に向て大に苦心し卒勞しつゝ蠶を飼つて居るけれども、どうも其病蠶が出るのて困ると云ふ歎聲が盛んに發しを聞するのである、果して或ひは何故に病蠶が出るかと云ふ原因を探究せずして、徒生現的の飼育を行ふからである、然らば蠶作の豊饒を望むには大に蠶體病理の如何なるものなるかを研究して病の因ず起る原因を明かにし、以て彼れ蠶を強健に飼育せれはならぬことである、然れども今日之が研究に就て開者稀も多いが、能く吾々に滿足な與ふべく說明したものが延無の狀態、で吾等は深く之を遺憾に思ふて居るのである、著者岩田氏は蠶學の研究に熱事して其蠶を極め、既へる蠶業者若しくは養蠶者たる者はんとの目的より、頃者本書を世に公にせられた、世に是れ唯夜に於ける燈燭を為もう、本書編分ちて絲論、各論、蠶病防論の三つとし、有ゆる蠶病に就て學理と實際との二方面に亘り遺憾なく之れを說明し、更に進んで之が防防法を于盤切に述べられた、恐らく近來の好著にして又本書の如く養蠶者に稀益を與へ、蠶業研究者に便利を與ふるものにあるまい、故て使に推奬して憚らんのである。（實價常價五拾錢發行所東京市神田區鳥土代町三ノ一明文堂）

北越の蠶業 第六十七號

大日本蠶絲會新潟支會發行

新潟縣蠶絲會は一千有餘の會員を有し組る簡勢の團體であつたが、客秋本會新潟支會と合併し以て同一歩調の下に斯業の改善發達を圖るとし、同時に其機關雜誌北越の蠶業は支會に於て月刊を發行することゝなつたのである、支會として機關雜誌を發行するのは恐らく之れが嚆矢であらう、夫れ鬼に角本誌が頗る穩健で大に理味に富んで居る、嗽々讀者は喜んであらう、併し整編の事のやうだが表紙の意匠中に在る蠶が頭を擡げた圖は如何にもキヲツロの樣に思はれて寒ろ冷淡だと云ふ感がしてはどうであらうか、一の發の名誉の為めて願く（定價一部郵稅共五錢）

蠶業講義錄第二期第一號

大日本蠶絲會發行

第一號から第四號迄は第二期に移れる本講義錄には、桑樹栽培論、蠶種論、蠶種論前編蠶種製造概論、蠶種論後編、蠶種孵化論、物理學、化學、植物學、動學等を載せ、京都蠶業講習所教官鈴氏が悉くその名分を擔して執筆せられてある、斯學研究者の資には好適の資料であらうか。

松下恵三郎著

桑樹栽培法　全

横田長太郎著

桑樹問題は現今我蠶絲業の大問題なり、夏秋蠶飼育すべきか、春蠶飼育すべきか、桑園問題は如何に解決し、以て當業者の幸福を增進すべきか、等諸種の問題なり、畿内地方の桑園は如何に改良し、以て當業者の幸福を增進すべきか、若人が能く開く當業者の歎賞

TABLE OF MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Mars 1908.)

	Report.	Brought over.	Arrivé.	Arrivel.	Vendu.	Sold.	Exporté.	Export.	Renvoyé.	Sent back	Arrgeptor.	Brought forward.
Filature.	13.105	Picul.	5.439	Picul.	4.816	Picul.	—	Picul.	1.078	Picul.	1.271	Picul.
Zagori.	4.361		183		590		—		60		3.794	
Kakeda.	1.184		37		34		—		8		1.179	
Autres.	81		—		—		—		3		78	
Total.	18.691		5.659		5.440		6.479		1.149		6.323	
1907.	2.591		3.960		2.388		2.297		432		3.781	

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Mars 1908.)

交詢餘錄

本會學藝委員にして農商務技師なる同氏は今回三級俸下賜せられたり

▲芳賀權四郎氏　本會學藝委員にして生絲檢査所技師なる同氏は今回五級下賜せられたり

▲明石弘氏　本會學藝委員にして蠶業試驗所技師なる同氏は今回本會技師蠶業試驗所技師に任じ高等官六等に叙し五級俸下賜せられたり

▲窪田顯次郎氏　水晶特別會員にして縣立蠶業學校教諭なる同氏は今回特別會員蠶業學校教諭に任じ十二級俸下賜せられ山縣立蠶業學校長兼教諭に任じ十二級俸下賜せられたり

▲狩野辰男氏　本會特別會員にして靜岡縣蠶業試驗場技師なる同氏は今回特別會員に四百圓給與せられ俸下賜せられたり

▲石渡繁胤氏　本會學藝委員にして蠶業試驗所技師なる同氏は今回本會學藝委員にして蠶業試驗所技師に任じられたり

▲赤星朝暉氏　本會通常會員にして縣立加茂農林學校長なる同氏は今回三級俸下賜せられたり

▲坂本彩之助氏　本會農兒島支會長にして同縣知事なる同氏は今回從四位に叙せられたり

▲男爵平田東助氏　本會特別會員なる同氏は今回學位令第二條に依り法學博士の學位を授けらる

▲中島金也氏　本會特別會員なる同氏は今回公同の事務に勤務し其勞績多大なりとして今回賞勳局より感狀等を下賜せらる

宮城縣加美郡中新田町長　中島金也

登性篤實風に村政に忠ひ一郷の望あり町村制施行の來選まれて町長となること六回能く地方自治の精髓を體し常に校舍を增築し教育の奬勵且つ實業に力を盡し農事思想の涵養に力めて遺憾なく其他善業の整理に積極的事業の擴張に努力し殊に公同の事務に勤勞し勞績顯著なりと依て明治十四年十二月七日勅定の感狀を賜ひ其善行を表彰せらる

交詢餘錄

○書籍雲從　表紙雲友會報初號より第九號（明治四十年六月發行）迄讓受し代價は原價以上にても宜し御持合の方は御通知を請ふ　栃木縣農學校内　高橋重吉

大日本蠶絲會報廣告料

特等		並等	
一回乃至十五回（一回ニ付）	八圓五十錢	一頁半頁	四分ノ一頁
一回乃至十二回（一回ニ付）	五圓	一頁半頁	四分ノ一頁
一回乃至七回（一回ニ付）	十圓	十二圓	四圓
一回乃至六回（一回ニ付）	六圓	七圓	四圓
一回乃至三回（一回ニ付）	三圓五十錢	四圓	十圓
一回乃至十二回（一回ニ付）	八圓	六圓	十三圓五十錢
一回乃至七回（一回ニ付）	五圓	三圓	三圓

四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク

●會員ハ右料金ノ二割引トス●特等ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絕ス●料金ハ前金ニアラサレハ掲載セス●一頁ハ一行二十七字詰七十二行トス

◎本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十一年四月二十日印刷發行

禁轉載

編輯兼發行人　東京市神田區美土代町三丁目二番地　小池市松

印刷人　東京市神田區美土代町三丁目二番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町三丁目二番地　三秀舍活版所

發行所　東京市神田區美土代町三丁目二番地　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

MARCHÉ DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

La circulation de l'argent à Londres devenait bonne ; mais les usines du tissage en Europe et en Amérique ayant été toujours en inactivité, notre marché des soies continuait à être défavorable pendant le mois de mars. *Shinshu* extra No 1 qui était de yen 865 au commencement du mois, a baissé à yen 850. Pendant la seconde décade, on a enregistré bien des affaires par suite de l'arrivage des soies de printemps ; de plus, la consommation indigène augmentant, nos stocks ont diminué quotidiennement. Mais entrant dans la dernière décade, l'arrivage des soies nouvelles n'étant pas abondant et les demandes nouvelles n'étant pas parvenus, notre marché a perdu de nouveau son activité.
Toutefois, le nombre total des balles traitées pendant ce mois a atteint le chiffre de 5,357 1/27 accusant une augmentation de 4,880 1/2 sur celui des balles traitées pendant le mois correspondant de l'exercice précédent. Aussi, nos stocks qui s'élevaient, à un moment donné, à plus de 45,000 balles, sont descendus au chiffre de 25,000 balles.

RAWSILK MARKET.

THE YOKOHAMA RAWSILK MARKET.

Though the money market of London was reported to be in a good condition, the spinning industry of Europe and America was still in a dull state. So that the rawsilk market of Yokohama was influenced thereby not a little, the condition being all inactive throughout the month. We epitomize here briefly the fluctuation of prices of the silks during the month under review. Extra No 1 of *Shinshu*, which changed hands, at the beginning of the month, at Y. 865 and showed a downward tendency, was quoted a little later at Y. 850. Coming to the middle of the month, the spring silk came to be placed on the market, and much transaction was conducted. Especially, the good condition of the domestic demand caused the stock to be greatly decreased. In the latter part of the month, however, the insufficient supply of new silks, what was already anticipated, and the lack of new orders combined to make the market very stagnant. However, the total quantities of the silks transacted during the month reached the respectable figures of 5,357 bales. This shows in fact an increase of 4,480 bales as compared with the number of bales transacted during the corresponding period of the preceding year. The stock lying on the market which reached at one time, 45,000 bales, was at last decreased to 15,000.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filaturs.	Prix. Prices.
	Soie. Silk.				Maximum du prix. Highest prices.	
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	—	—	—	—	——	——
2	140	206	19	—	Shinseikwan.	950
3	71	125	64	628	Hinyōsha.	915
4	102	96	17	495	Kanrasha.	930
5	154	171	14	—	Yajimagumi.	940
6	87	157	39	—	Kaishinsha.	870
7	160	107	39	139	Sōshinsha.	880
8	—	—	—	—	——	——
9	206	199	55	—	Meisuikwan.	850
10	153	141	15	—	Doiseishijō.	900
11	143	290	41	900	Kochitaniseishijō.	890
12	235	178	26	—	Nansoriseishijō.	900
13	145	116	29	—	Kariyaseishijō.	880
14	121	146	48	—	Makiseishijō.	890
15	—	—	—	—	——	——
16	478	323	62	—	Shōjyōken.	885
17	209	480	22	20	Yajimagumi.	900
18	174	216	19	437	Hōsansha.	860
19	186	218	68	1.233	Amatakyōdōseishijō.	855
20	279	184	57	—	Tankaharaseishijō	900
21	—	—	—	293	——	——
22	—	—	—	61	——	——
23	558	433	37	—	Kōseisha.	910
24	264	336	55	—	Shinsankwan.	900
25	222	272	147	—	Hikamikyōdōseishijō.	885
26	337	197	112	—	Kyōdōseishijō.	880
27	125	188	60	—	Kamiinsha.	862
28	206	312	25	1.181	Nittsaha.	900
29	—	—	—	—	——	——
30	670	212	46	420	Shōjyōken.	880
	233	137	20	602	Tsuyamaseishijō.	890
Total	5.658	5.440	1.107	6.479	——	——

1 yen want environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

Departements	Cocons au printemps	Cocons en été	Cocons en automne	Total
	Koku	*Koku*	*Koku*	*Koku*
Toyama	12.135	3.297	1.016	16.448
Tottori	26.520	6.399	5.363	38.282
Shimane	22.121	1.968	9.147	33.236
Okayama	11.409	3.892	4.399	19.700
Hiroshima	6.016	318	2.301	8.635
Yamaguchi	7.626	1.754	4.281	13.661
Wakayama	9.522	792	2.596	12.910
Tokushima	19.812	2.774	6.496	29.082
Kagawa	2.472	129	696	3.297
Ehime	23.378	3.741	7.838	34.957
Kochi	23.227	7.098	5.686	36.011
Fukuoka	6.214	519	1.165	7.898
Oita	15.334	3.339	4.896	23.569
Saga	5.603	2.529	1.277	9.409
Kumamoto	29.324	3.395	13.632	46.351
Miyasaki	15.302	2.299	4.279	21.880
Kagoshima	15.803	2.586	5.767	24.156
Okinawa	86	28	8	122
Hokkaido	6.695	1.476	„	8.171
Total	2.241.548	469.360	746.059	3.456.967
Contra :				
1906	1.864.479	413.589	692.137	2.970.205
1905	1.771.754	367.673	583.906	2,723.333
1904	1.850.903	390.958	583.815	2.825.676
1903	1.652.385	378.897	555.800	2.587.082
1902	1.774.936	359.772	414.516	2.549.224
1901	1.798.672	345.617	381.892	2.526.181
1900	2.029.806	377.466	346.631	2.753.903
1899	1.819.936	372.142	320.484	2.512.562
1898	1.504.351	301.393	221.595	2.027.339
1897	1.654.722	273.257	193.965	2.121.944

Note : 1 *Koku*=environ 180 litres.

Prix moyens des soies grèges pendant les dix dernières années

publiés par le syndicat des marchands des soies de Yokohama.

Années	Titre fin Prix moyen	Titre ferme bon No. 1 Prix moyen	Zaguri No. 1 Prix moyen	Kakeda 1 tête cheval Prix moyen
	Yen	*Yen*	*Yen*	*Yen*
1907	1.340	1.217	1.199	1.180
1906	1.082	1.040	1.080	1.033
1905	1.000	960	989	928
1904	937	910	928	876
1903	1.061	1.007	1.017	948
1902	980	951	962	893
1901	917	867	860	809
1900	996	969	953	927
1899	1.162	1.092	1.073	1.036
1898	896	880	849	823

Production des cocons au Japon

Recolte de 1907

publiée par le ministère de l'Agriculture et du Commerce.

Departements	Cocons au printemps	Cocons en été	Cocons en automne	Total
	Koku	*Koku*	*Koku*	*Koku*
Tokio	61.738	221	23.555	85.514
Kioto	45.410	9.719	6.528	61.657
Osaka	1.324	547	289	2.160
Kanagawa	60.914	1.734	15.339	77.987
Hiogo	53.748	7.853	2.685	64.286
Nagasaki	2.122	850	648	3 620
Niigata	57.620	7.080	7.440	72.140
Saitama	196.387	2.885	54.201	253.473
Gumma	186.876	2.794	64.245	253.915
Chiba	65.134	460	22.353	87.947
Ibaraki	81.762	4.858	34.194	120.814
Tochigi	28.875	2.967	9.339	41.181
Nara	5.683	2.879	1.603	10.165
Mie	47.977	14.599	21.928	84.504
Aichi	109.185	53.958	57.643	220.786
Shizuoka	70.511	12.621	21.554	104.686
Yamanashi	101.620	7.285	28.483	137.388
Shiga	36.196	38.017	4.732	78.945
Gifu	92.193	31.938	49.043	173.174
Nagano	237.270	154.250	140.801	532.321
Miyagi	68.175	415	16.890	85.480
Fukushima	153.729	33.084	56.463	243.276
Iwate	45.038	2.355	977	48.370
Aomori	4.213	789	89	5.091
Yamagata	106.977	6.189	18.441	131.607
Akita	16.626	1.431	642	18.699
Fukui	27.517	10.245	746	38.508
Ishikawa	18.129	9.004	4.365	31.498